

博 多 24

—博多遺跡群第61次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第252集



1991

福岡市教育委員会

博 多 24

—博多遺跡群第61次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第252集



遺跡調査番号 8962

遺跡略号 HKT

表紙の印影は

1~2面間出土の銅印 ($\times 1.41$ 倍)

1991

福岡市教育委員会

序

現在、「海と歴史を抱いた文化の都市」「活力あるアジアの拠点都市」として都市づくりを進めている福岡市にあって博多は、古代から中世にかけて对外貿易の一大拠点として栄えた地域であります。

近年、急速に進む開発に伴って、70次近い調査が行われ、輸入陶磁器類をはじめとして、多種多様の遺物が出土しています。

そして、中世都市博多の様相も少しずつ解明されつつあります。

本書は第61次調査の概要を報告するものであります。

本書が市民の方々の埋蔵文化財の保護、また、学術研究に少しでも貢献できれば幸いです。

また、調査に際して、ご協力を頂いた松下タカ氏、ご指導を賜りました関係各位に心より感謝の意を表します。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

- 本書は博多区店屋町182-1~5の建物建設に伴う福岡市教育委員会が実施した、博多遺跡群第61次調査の報告書である。
- 本書に使用した遺構実測図は皆波正人、林田憲三、高浪信夫、塚原義一郎が、遺物実測図は皆波、林田が作成した。また、製図は菅波、入江のり子、浜石正子、撫養久美子が行った。
- 本書に使用した遺構・遺物写真は皆波が撮影した。
- 遺物の整理には、有島美江、上川保子、太田順子、緒方まきよ、藤信子、西島信枝、前田みゆき、山田由美子があたった。
- 遺構番号は発掘時に検出した順に通し番号を付け、これを遺物の注記等に用いた。本書ではその遺構番号の前の略号を付けて用いている。例：SE001、SX059等
- 本書に使用した方位はすべて磁北である。
- 本書の執筆・編集は林田の協力を得て皆波が行った。なお、付録で福岡大学人文学部助教授佐伯弘次氏に花押墨書きについての上稿を賜った。
- 今回報告した図面、遺物、写真などは福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- 遺構の年代決定は大宰府土器編年、小野正敏「出土陶磁よりみた十五、十六世紀における画期の変遷」『MUSEUM』416 1985等の年代観に拠った。

遺跡調査番号	8962	遺跡番号	HKT61
調査地地番	博多区店屋町 182-1~5	分布地図番号	天神49 A-1
開発面積	227.7m ²	調査対象面積	227.7m ²
調査期間	1989年12月4日~1990年1月29日	調査実施延べ面積	280m ²

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
3. 位置と環境	2
第2章 調査の概要	4
1. 調査経過	4
2. 調査の概要	5
第3章 調査の記録	9
1. 第1面の調査	9
2. 第2面の調査	11
3. 第3面の調査	15
4. その他の遺物	39
第4章 まとめ	41
付録 博多61次調査地点出土の花押墨書き木簡	44

福岡大学人文学部助教授 佐伯弘次

挿図目次

第1図 博多遺跡群調査位置図	3	第12図 SE082.096遺構実測図 (1/40)	17
第2図 博多遺跡群第61次調査地点位置図	4	第13図 SX130遺構実測図 (1/40)	18
第3図 調査区南壁・西壁上層図 (1/100)	5	第14図 SX135遺構実測図 (1/40)	19
第4図 第1～4面全体図 (1/100)	7・8	第15図 SX131、142遺構実測図 (1/40)	20
第5図 SE001遺構実測図 (1/40)	9	第16図 第3面出土遺物実測図1 (1/3)	22
第6図 第1面出土遺物実測図 (1/3)	11	第17図 第3面出土遺物実測図2 (1/3)	24
第7図 SB144遺構実測図 (1/80)	12	第18図 第3面出土遺物実測図3 (1/3)	18
第8図 SP050遺構実測図 (1/40)	12	第19図 第3面出土遺物実測図4 (1/3)	19
第9図 第2面出土遺物実測図 (1/3, 1/2)	14	第20図 第3面 (SX130) 出土遺物実測図5 (1/3)	29
第10図 SK091、113、114、116遺物実測図 (1/40)	15	第21図 第3面出土遺物実測図6 (1/3)	30
第11図 SX059遺構実測図 (1/40)	16	第22図 SX130出土木器実測図1 (1/3)	33

第23図 SX130出土木器実測図2 (1/3)	34	第26図 第3面出土鉄・銅製品実測図 (1/3)	38
第24図 SX130出土木器実測図3 (1/3)	35	第27図 その他の遺物 (2/3)	40
第25図 第3面出土鉄造関連遺物実測図 (1/3)	37	第28図 パスバ文字鉛錆印	43

図版目次

- 図版1 1. 第1面全景(東から) 2. 第2面全景(東から)
- 図版2 1. 第3面全景(東から) 2. 最下層全景(東から)
- 図版3 1. 調査区南壁十層 2. 調査区西壁十層 3. SE001(東から) 4. SE001十層(東から)
- 図版4 1. SB144(北から) 2. P050遺物出土状況(南から) 3. SF082(北から)
4. SE096(西から)
- 図版5 1. SX059(東から) 2. SX059(南から) 3. SX059列石断ち割り(南から)
4. SX059 列石断ち割り(西から)
- 図版6 1. SX130十層(南から) 2. SX130 遺物出土状況 3. SX130 遺物出土状況
4. SX130遺物出土状況
- 図版7 1. SX135(南から) 2. SX135 断ち割り(北から) 3. SX135 出土堆場
4. SX142(西から)
- 図版8 山土遺物1
- 図版9 出土遺物2
- 図版10 出土遺物3

表日次

- 表1 SP050出土上師器法量
- 表2 第3面出土十師器法量
- 表3 銅鉄・鏡表

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至る経緯

1989年5月15日、松下タカ氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区店屋町182-1~5に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。同地は、福岡市教育委員会が博多遺跡群として周知している地域であり、周辺の調査成果からも、遺構・遺物の存在が予想できた。そこで埋蔵文化財課では同年5月30日、試掘調査を実施し、遺構・遺物の存在を確認した。これをもとに、埋蔵文化財課は施工業者である上村建設株式会社と協議に入った。その結果、現状での保存は困難であり、記録保存ということとなった。調査は工期の関係と調査の安全確保のため、基礎杭工事・H鋼打ち込み後、行うこととなった。調査には当時、店屋町で留学生会館建設に伴う発掘調査を行っていた浜石哲也、菅波正人（埋蔵文化財第一係）が担当することとなり、菅波がこれにあたった。

調査は1989年12月4日から開始し、1990年1月29日に終了した。なお、表上及び調査中の廃土の搬出は上村建設株式会社にご協力いただいた。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託 松下タカ

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎（前任）井口雄哉

埋蔵文化財課長 柳川純孝

埋蔵文化財第二係長 朝沢一男

調査業務 埋蔵文化財第一係 松延好文

調査担当 埋蔵文化財第一係 菅波正人（現第二係）

調査作業 内野弘行 大橋善平 斎山潔 熊本義徳 高浪信夫 塚訓義一郎 中川敏男
津川真千代 吉住シズエ

整理補助 林田憲三（西南学院大学講師）

調査中は博多56次調査を行っていた浜石哲也氏をはじめとして、多くの人達の援助を受けた。また、調査に関する条件整備、調査中の廃土の搬出については上村建設株式会社のご協力を頂いた。ここにお礼申し上げます。

3. 位置と環境

博多遺跡群は福岡平野の博多海岸に位置し、西を那珂川、東を石堂川に挟まれた博多浜と息の浜と呼ばれる、2つの大きな砂丘上に立地する。この地域は弥生時代から現在まで絶えることなく、生活が営まれた複合遺跡である。特に、古代から中世にかけて日本における对外交渉の拠点都市として、重要な位置を占めてきた。1977年に始まった地下鉄工事に係わる発掘調査を期に、都市計画道路博多駅築港線関係の調査、民間開発に係わる調査など今まで70次近い調査が行われ、当時の重要性を示す数多くの遺構・遺物が出土した。

今回報告する61次調査地点の周辺の調査例について見ていく。この地区は博多浜の砂丘が西北側に傾斜していく部分に当たる。地下鉄堀川町交差点の調査では12世紀半ばの南北溝が検出された。この地域は平清盛が作ったとされる（応保元年、1161年）「袖の渓」中心地と考えられていたところであるが、少なくとも12世紀初頭には陸地化していたことが分かった。その西側の博多29次調査では16世紀末～17世紀前半に行われた大規模な埋め立て工事が確認された。その埋め立ての下層からは13世紀末～15、16世紀の遺物が出土しており、13世紀末にはそこは干潟化していたと見られている。今回の調査区の南側で行われた博多第14次調査では標高0m付近で、地山の砂層が西北に向かって緩やかに傾斜し、その上に厚さ50～60cmで泥炭層が堆積している。そして、その中から、多量の白磁類が出土した。これらは荷揚げの際に壊れてここに捨てられたものと推測されている。東側で行われた博多40次調査地点では14世紀～16世紀末まで、継続した東西方向の道路が検出された。道路の方向はN-50°-E前後で、古代から見られていた東西・南北方向の町割りに大きな変化が見られる。ここは砂丘が落ち込んで、堆積性の砂層が基盤となっている。そこを12世紀前半を前後する時期に埋め立てて、生活面を形成している。西側の博多47次調査では14世紀代の鋳造関連の遺構・遺物が多量に出土している。

これらの調査成果から、博多浜と息の浜の砂丘は12世紀初頭には陸地化して、陸橋状につながる。その後、2つの浜に挟まれた入り江は干潟化が進み、それにともなって、12世紀から13世紀にかけて、暫時、埋め立てされて、生活の場として活用される。このような開発が進む一方で、それまでの東西・南北方向の溝などに見られていた古代的な町割りが、砂丘の地形に沿った町割りに変化していく。中世都市博多の大きな変革期と言えよう。

参考文献

中山平次郎著『古代の博多』九州大学出版会、1984

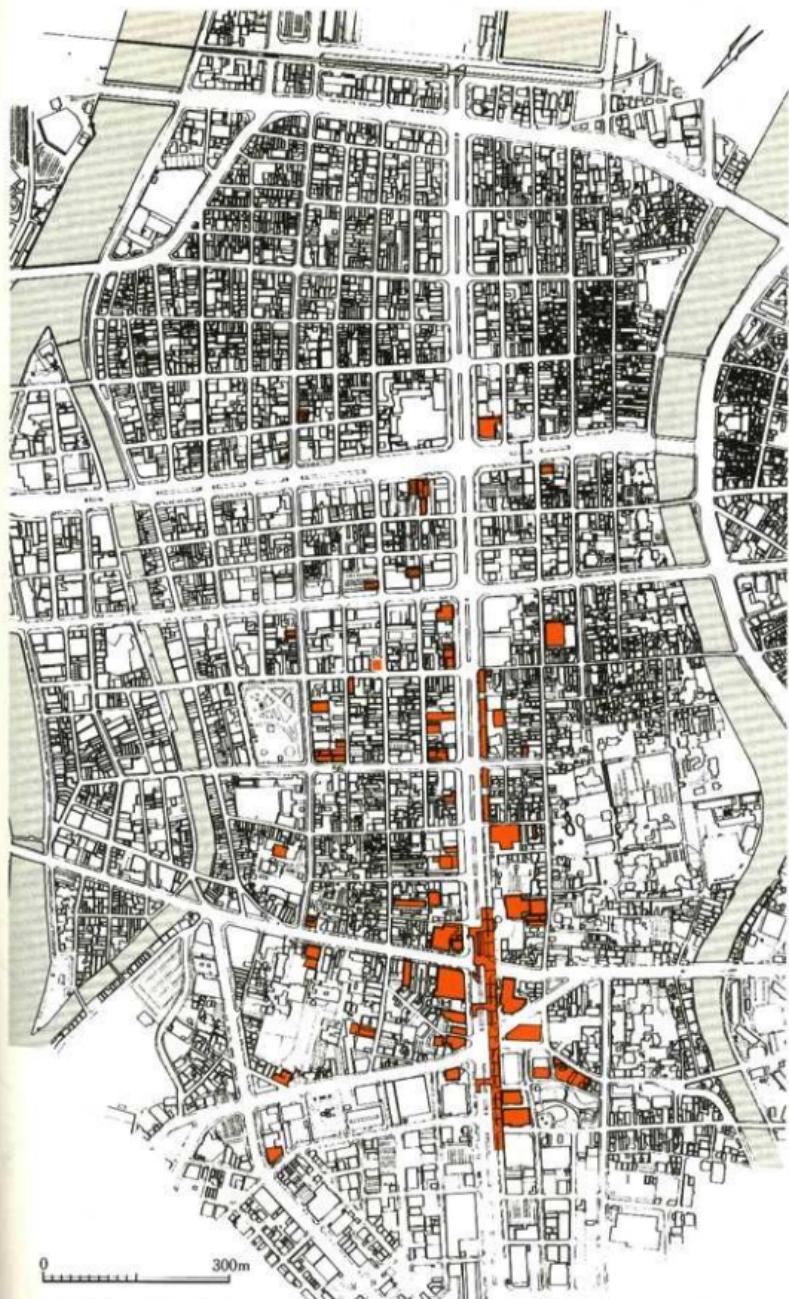
川添昭二編『よみがえる中世(1) 東アジアの国際都市 博多』平凡社、1988

福岡市教育委員会『博多15－博多遺跡群第40次調査の概要－』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第230集』

1990

福岡市教育委員会『博多15－博多遺跡群第29次調査の概要－』『福岡市埋蔵文化財調査報告書第148集』

1990



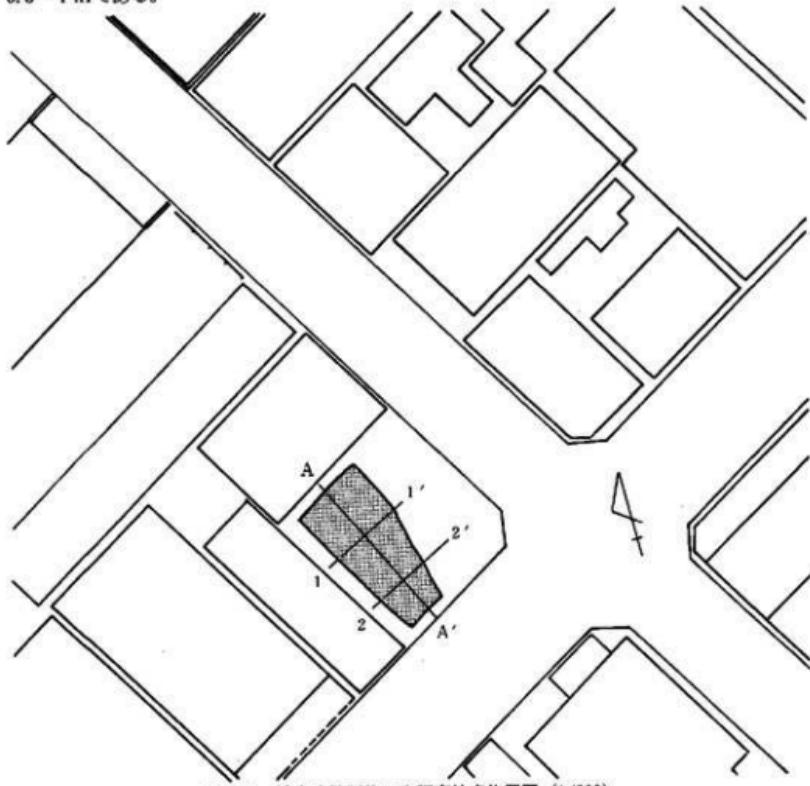
第1図 博多遺跡群調査位置図

第2章 調査の概要

1. 調査経過

発掘調査は1989年12月4日に表土剥ぎを開始し、1990年1月29日に終了した。調査の対象は開発地全域であったが、調査の工程上、全域を調査することは困難であるということと廃土置き場などの確保のため、調査区域を西側半分とした。

表土の除去は試掘結果に基づき行った。試掘の結果では生活面は幾層にも及ぶと予想された。重機で約1.9mの近現代の客土を取り除いた所で、焼土層を検出した。焼土層は厚さ約30cm程度ある。この焼土層を取り除いた所で、井戸や礎石が確認できたので、その面を第一面として遺構の検出作業にはいった。調査は土層に留意しつつ、順次掘り下げていって、遺構の検出に当たった。設定した遺構面は最下層までで4面になる。第1面の標高約2.4m、最下層の標高約0.5~1mである。



第2図 博多遺跡群第61次調査地点位置図 (1/500)

2. 調査の概要

1) 立地

博多遺跡群は那珂川と御笠川に挟まれた二つの大きな砂丘上に立地する。本調査区は内側の砂丘が西側に傾斜していく低地に位置する。

2) 層序

最下層は堆積性の砂で、西北側に傾斜している。その上に植物遺体等を含む暗青灰色の粘質土が堆積し、湿地帯の様相を呈している。造構は低湿地を埋め立てた時に形成される。埋め立て後、變度となく、整地がおこなわれ現代に至っている。各層を時期的に分けると大きく4つに分けられる。

I. 焼土層以後の層（近世以後）

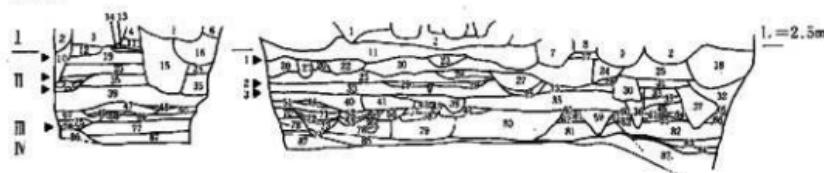
II. 埋め立て後の整地層で、焼土層以前の層、この中は更に細かく分けられる（13世紀中頃～16世紀末）（第1面～3面）

III. 湿地の埋め立ての層（13世紀前後）

IV. 最下層（自然堆積の砂層）、上に暗青灰色粘土が堆積している。（13世紀以前）

3) 各面の遺構・遺物

第1面



- | | | | |
|---------------------|---------------------|---------------------|-------------------------|
| 1. 黒褐色粘土（焼土、炭化物混る） | 23. 橙褐色粘土（焼土、炭化物混る） | 45. 黒褐色粘土+黃褐色粘土 | 67. 黑褐色粘土（焼土、炭化物混る） |
| 2. 黄褐色粘土（焼土、炭化物混る） | 24. 10と同じ | 46. 黃褐色砂 | 68. 黄褐色砂 |
| 3. 黑茶褐色粘土（焼土、炭化物混る） | 25. 黄褐色粘土 | 47. 黑褐色粘土（焼土、炭化物混る） | 70. 29と同じ |
| 4. 黄褐色粘土 | 26. 黄褐色粘土 | 48. 黑茶褐色粘土（砂利混る） | 71. 黑褐色粘土 |
| 5. 底白色砂 | 27. 海底色粘土+黄褐色粘土 | 49. 黑褐色粘土+灰白色砂 | 72. 黑褐色粘土 |
| 6. 陰灰白色 | 28. 27と同じ | 50. 黑褐色粘土+灰白色砂 | 73. 29と同じ |
| 7. 黑褐色粘土（炭化物混る） | 29. 黑褐色粘土 | 51. 黄褐色粘土質 | 74. 黑褐色粘土（炭化物混る） |
| 8. 焼土 | 30. 黑褐色粘土（砂利混る） | 52. 51と同じ | 75. 黑褐色粘土 |
| 9. 2と同じ | 31. 海底灰褐色粘土 | 53. 黑褐色粘土 | 76. 黑褐色粘土 |
| 10. 黑褐色粘土 | 32. 29と同じ | 54. 黑褐色粘土+灰白色砂 | 77. 62と同じ |
| 11. 10と同じ | 33. 黑褐色粘土 | 55. 52と同じ | 78. 62と同じ |
| 12. 深海底曲線 | 34. 33と同じ | 56. 黑褐色粘土（炭化物混る） | 79. 隆起灰白色土（砂利混る） |
| 13. 8と同じ | 35. 10と同じ | 57. 黑褐色砂質土 | 80. 灰白色砂+灰褐色砂 |
| 14. 11と同じ | 36. 32と同じ | 58. 反応砂（鋼津港混る） | 81. 綠褐色粘土 |
| 15. 3と同じ | 37. 1と同じ | 59. 53と同じ | 82. 緑褐色粘土+緑反応砂土（灰白色砂混る） |
| 16. 8と同じ | 38. 黑褐色粘土 | 60. 灰白色砂 | 83. 隆起灰白色粘土（灰白色砂混る） |
| 17. 隆起褐褐色粘土 | 39. 石骨を含む層 | 61. 綠褐色粘土質 | 84. 黑茶褐色粘土（木質層） |
| 18. 灰褐色粘土 | 40. 海底灰褐色粘土 | 62. 細粒的粘土質 | 85. 隆起灰白色砂 |
| 19. 灰褐色粘土 | 41. 石骨を含む層 | 63. 62と同じ | 86. 灰白色砂 |
| 20. 黑褐色土（炭化物混る） | 42. 26と同じ | 64. 黑褐色粘土+黄褐色粘土 | 87. 黑褐色灰白色土 |
| 21. 10と同じ | 43. 10と同じ | 65. 黄褐色砂 | |
| 22. 黄褐色粘土（焼土、炭化物混る） | 44. 灰白色砂 | 66. 65と同じ | |

第3図 調査区南壁・西壁土層図 (1/100)

焼土層を除去した所で、設定した面である。遺構面は硬くしまっており、生活面と考えられる。遺構面の標高は2.2~2.4mである。遺構は井戸、土壙、柱穴、礎石等を検出した。礎石、柱穴は柱筋に一定の方向性が見られたが、建物として復元するには至らなかった。SE001は石組の井戸で発掘の際は混じりけのない灰白色の砂で埋め戻されている。遺物は明代の染付、青磁、白磁、李朝青磁、備前焼、十郎器等が出上している。上面の旋土層からは同様の陶磁器類に加え、唐津焼や伊万里焼等の国産陶磁器類が出土しており、この焼土層は島津氏の博多焼き打ち（天正十四年（1586））以後のものと考えられる。したがって、第1面は下限をその時期として、16世紀代に位置づけられると考える。

第2面

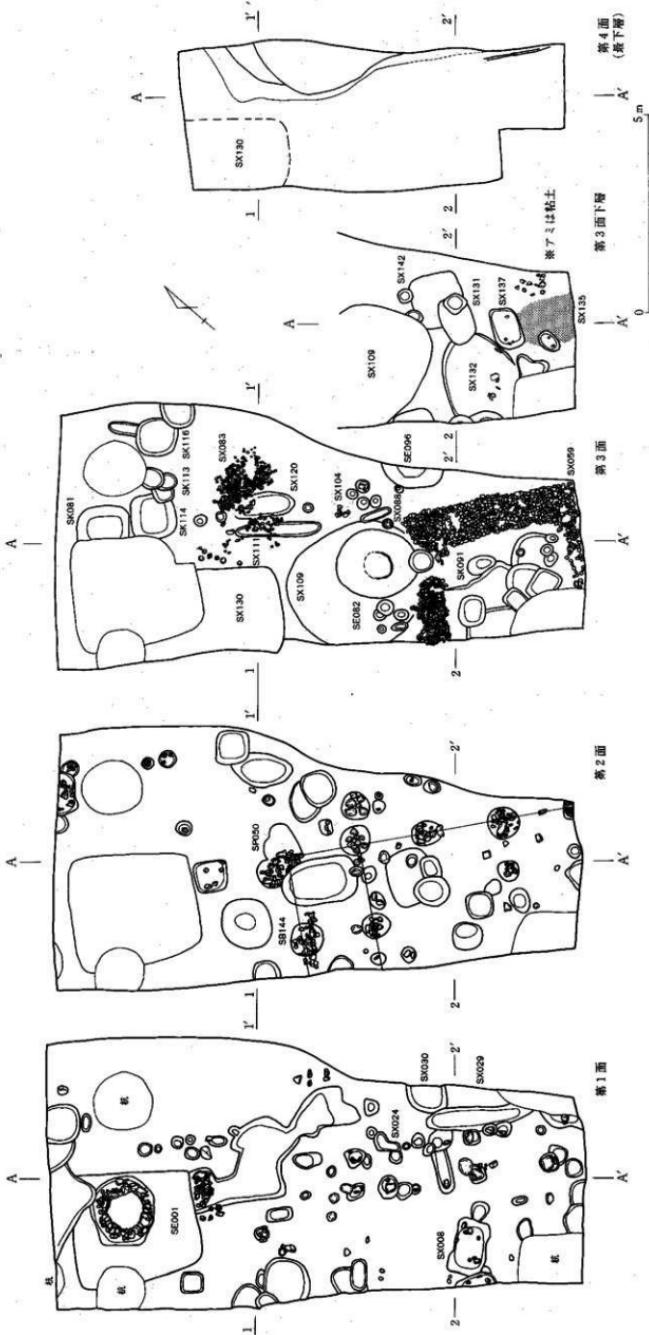
第1面の整地層を30~40cm下げた面である。土層観察から1~2面間には2層の整地層（第20、25層）が存在したが、遺構検出面を2層目（第25層）の下に設定し、調査を行った。標高約1.9mを測る。遺構は建物、土壙、柱穴等を検出した。建物は調査区中央にあり、西側に広がる。北側に庇をもち、桁行4間以上、梁行2間以上である。建物の柱穴には地鎮と考えられる土師器の埋納が行われている。遺物は少ないが、整地層を掘り下げる際に明代の染付、青磁、白磁、備前焼、土師器、銅錢などが出上した。このほか、中国製と考えられる銅印も出土している。第2面の時期は15世紀代に位置づけられると考える。

第3面

第2面から20~30cm下げた面で、標高1.4~1.7mを測る。1、2面と異なり、整地層にしまりがない。遺構は列石遺構、井戸、土壙、柱穴を検出した。SX130は調査区北側にあり、最下層の暗褐色粘質土まで掘り込んだ土壙である。ここからは多量の木製品が出土した。木製品には下駄、板革履、箸などのほか、特徴の駒、花押を書いた木札、漆器碗が出土した。SX059は調査区南側にあり、全面が検出できていないため、規模等は不明確であるが、規模5m程の方形の列石遺構と考えられる。SX059の下層からは鉄造に関係したと考えられる遺構、遺物を検出した。遺構はかなどは検出できなかつたが、作業場と考えられる粘土を貼った面とそれに近接して、2基の溜枡を検出した。遺物は鉄型、坩堝、ふいご羽口、銅滓が出土した。第3面は上の2つの面と異なり、同一の生活面ではないが、第3面の遺構は13世紀中頃~14世紀後半に位置づけられる。

第4面（最下層）

第3面から50~80cm下げた所で灰白色砂の堆積層に達した。標高1m前後である。この層から掘り込んだ遺構はない。この上に暗青灰色粘質土が堆積し、それを埋め立てて3面以後の生活面が形成される。暗青灰色粘質土からは白磁、龍泉窯青磁、同安窯青磁、瓦器、ての字状口縁の土師器皿等が出土している。遺物などから12世紀代にはまだ湿地であったと考えられ、13世紀を前後する時期に埋め立てが行われたと推定する。



第4図 第1~4面全体図(1/100)

第3章 調査の記録

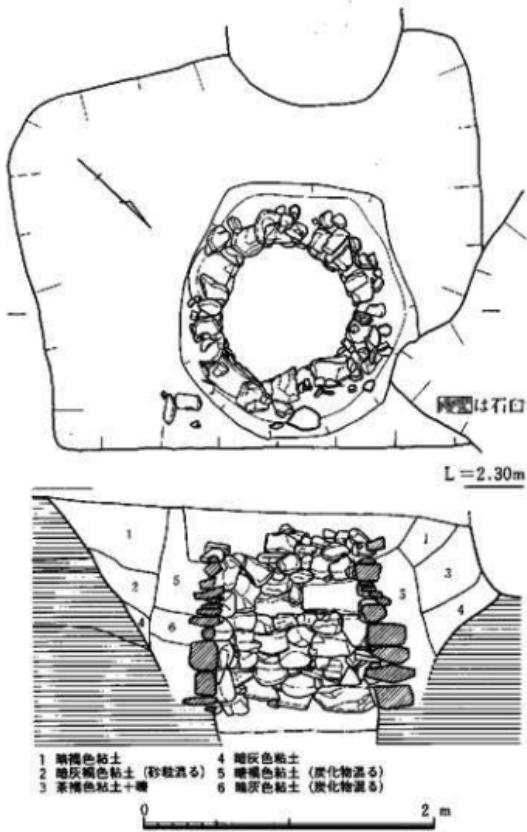
1. 第1面の調査

第1面は焼土層を除去したところで検出した面である。標高は約2.3mである。遺構面には硬くしまっており、生活面であったと考えられる。検出した遺構には焼土の上から掘りこまれたものもある。遺構は井戸、土壙、柱穴などを検出した。柱穴・礫石は多數検出し、柱筋に一定の方向性が見られたが、建物として復元するには至らなかった。遺物は明代の染付、青磁、白磁、備前焼、瓦質土器等のほか、唐津焼や伊万里焼などの国産陶磁器類も出土している。

S E 001 (第5図)

調査区の北側で検出した石

組の井戸である。掘り方は3.1×2.7mの長方形プランで、掘り方の北西側に井戸側が作られる。石組は20~60cmの大きさの砾石を用いて、円筒形に組み上げる。内径約90cm、高さ130cmで上面から約30cmのところまで組み上げる。それから上は井桁が組まれていたものとを考えられる。井戸は廃絶後、丁寧に埋め戻されており、上面から1. 黄灰色粗砂(厚さ30cm)、2. 灰白色砂(厚さ70cm)、3. 暗灰色粘土質(厚さ50cm)、4. 灰白色砂(地山、厚さ50cm)となる。井戸は上面から約2mまで下げたが、湧水が著しいため、井筒などは確認できなかった。最下面の標高0.6mを測る。遺物はほとんど掘り方から出土した。遺物には明代の染付、備前焼



第5図 S E 001 遺構実測図 (1/40)

～第1面～

のすり鉢、李朝青磁、十師器皿などがある。このほか、壊れた石臼が石組に使用されていた。井戸は焼土層の下面で検出しており、この焼土層が前章に述べた通り、天正十四年(1586)のものとすると、廃絶の下限はその時期に置ける。遺構が営まれた時期は明確にはしがたいが、出土遺物などから16世紀後半代に位置づけられると考える。

第1面出土遺物(第6図)

S E001出土遺物(1～9)

1～3は土師器である。1、2は皿で、3は杯である。1、2は体部は一旦直立した後に、直線的に外反する。底部の切離しは回転糸切りで、板状压痕・内底面のナデは見られない。1は器高1.9cm、口径6.4cm、2は器高2.3cm、口径7.8cm、3は器高2.5cm、口径11.2cmを測る。4は明代の染付の碗で、端反の口縁を呈する。口径11.0cmを測る。5は白磁の高台付の皿である。端反の口縁を呈する。口径15.0cmを測る。6は李朝の青磁碗である。胎土には砂粒を多く含み、釉色はオリーブ色を呈する。見込みには日跡が残る。口径15.8cmを測る。8は備前焼のすり鉢である。V期の特徴をもつ。口径27.5cmを測る。9は瓦質土器のすり鉢で、口縁端部が内側に肥厚する。7は土錘である。長さ4.9cm、幅1.8cmを測る。

S X008出土遺物(10～12)

10、11は土師器である。底部の切離しは回転糸切りで、板状压痕・内底面のナデは見られない。10は淡褐色を、11は灰白色を呈する。10は器高2.6cm、口径5.7cm、3は器高2.4cm、口径11.9cmを測る。12、13は陶器である。12は壺で、口縁の内外面に茶褐色の釉がかかる。口径8.5cmを測る。13は蓋で、茶褐色の釉がかかる。口径16.8cmを測る。

S X014出土遺物(14)

14は李朝の青磁碗である。釉は薄く、暗緑色を呈する。器高3.1cm、口径10.4cmを測る。

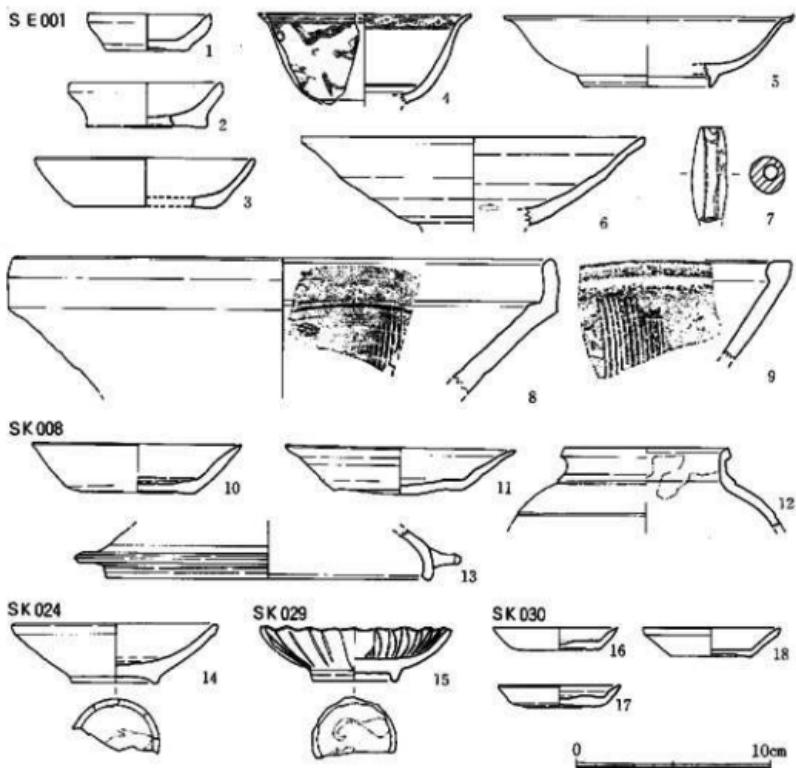
S X029出土遺物(15)

15は白磁の菊皿である。釉色は緑がかかった灰白色を呈する。器高2.7cm、口径9.7cmを測る

S X030出土遺物(16～18)

16～18は土師器である。色調は淡褐色を呈し、底部の切離しは回転糸切りで、板状压痕・内底面のナデは見られない。16は器高1.2cm、口径6.5cm、17は器高1.2cm、口径6.3cm、3は器高1.5cm、口径7.0cmを測る。

～ 第1面～



第6図 第1面出土遺物実測図 (1/3)

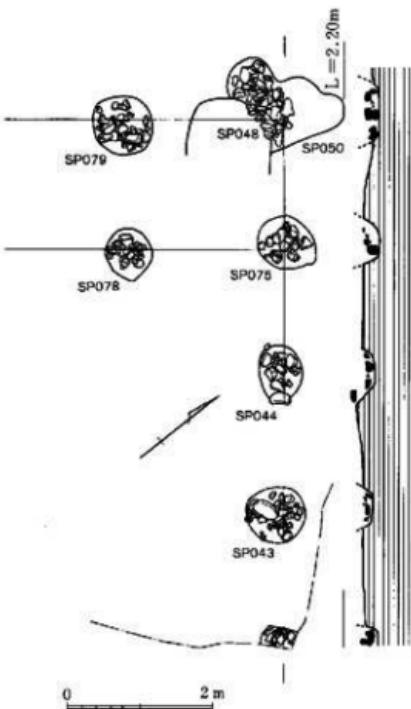
2. 第2面の調査

第2面は第1面から約30cm下がった面である。標高約1.9mである。土層観察では1～2面間に2層の整地層があった。2層目の上面では明確に遺構が捉えられなかったため、2層目の下面で遺構を検出した。したがって、第2面で検出した遺構には上面から掘りこまれているものもある。整地層は出土遺物などから16世紀を前後する時期と考えられ、遺構は建物跡、柱穴、土壤などを検出した。遺物は明代の染付、青磁、白磁、備前焼、瓦質土器等のほか、宋代、明代の銅鏡、中国製と考えられる銅印が出土している。1～2面間の整地層は出土遺物などから

16世紀を前後する時期のものと考えられ、第2面は概ね15世紀代に位置づけられる。

S B144 (第7図)

調査区中央で検出した建物である。先に述べた2層目の上面からではなく、下面から掘りこんだ遺構である。遺構は調査区外に広がるため、建物規模は不明確であるが、調査区内では梁行2間、桁行4間分を検出した。北側には庇の出を持つ。柱穴は径約80cmで、底にこぶし大の砾を敷き詰める。梁行の柱間は220m、桁行の柱間は180cmで、桁行720cm以上の建物と推測される。主軸方位はN-52°-Wとなる。SP075から土師器小皿が2個、SP043からは銅鏡1枚が出土した。また、SP048に接したSP050から完形の土師器杯、小皿が100個体以上と銅鏡2枚が出土している。SP050から出土した土師器は上向きのものや伏せたものがあったが、埋納に際して、特に意図的なものは見出せなかった。これらはSB144に対する地鎮行為と考える。



第7図 SB144 遺構実測図 (1/80)

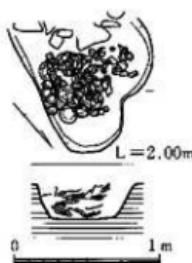
第2面出土遺物 (第9図1~65)

S B144 (1~3)

1~2はSP075から出土した土師器小皿である。底部の切離しは回転糸切りで、板状圧痕・内底面のナデは見られない。1は器高1.5cm、口径6.9cm、2は器高1.5cm、口径7.1cmを測る。3はSP043から出土した銅鏡である。一部欠けているが、皇宋通宝である。

S P 050 (4~65)

4・5は銅鏡である。4は開元通宝で、5は大觀通宝である。6~65は土師器杯、小皿である。小皿は器高1.2~1.5cm、口径6.4~7.4cm、杯は器高2.4~2.6cm、口径11.0



第8図 SP050 遺構実測図 (1/40)

～第2面～

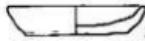
～13.3cmを測る。小皿の中には47の体部の立ち上がりが高いものもある。器高1.7cm、口径7.2cmを測る。底部の切離しは回転糸切りである。板状片痕・内底面のナデは一部に見られる。

表1 SP050出土土器法量表

番号	器高	口径	底径(cm)	板状片痕の有無(○・×)	番号	器高	口径	底径(cm)	板状片痕の有無(○・×)
6	1.3	7.0	5.5	×	36	1.5	6.6	4.6	×
7	1.3	7.0	5.6	×	37	1.4	7.0	5.3	×
8	1.4	6.5	5.2	×	38	1.5	7.1	5.7	×
9	1.3	7.2	6.1	×	39	1.3	7.1	5.3	○
10	1.3	7.1	5.4	○	40	1.4	7.0	5.0	×
11	1.2	7.0	5.0	×	41	1.3	6.5	5.6	○
12	1.4	7.0	5.7	×	42	1.4	7.4	5.5	×
13	1.4	6.9	5.2	×	43	1.1	6.7	5.5	×
14	1.4	6.8	5.7	×	44	1.5	6.8	5.0	×
15	1.4	7.5	5.7	×	45	1.4	7.0	5.3	×
16	1.4	6.8	5.2	×	46	1.7	7.2	5.1	○
17	1.5	7.2	5.4	×	47	1.7	5.9	4.3	○
18	1.3	6.9	5.7	×	48	2.5	13.0	9.4	×
19	1.3	6.7	5.6	×	49	2.6	11.5	8.1	×
20	1.3	7.0	5.3	×	50	2.5	11.0	8.1	×
21	1.3	6.7	5.5	×	51	2.4	12.5	9.0	×
22	1.3	6.7	5.5	×	52	2.4	11.7	7.8	○
23	1.5	7.0	5.1	×	53	2.4	11.9	8.0	×
24	1.5	6.4	5.4	×	54	2.5	12.0	8.1	×
25	1.4	6.9	5.5	×	55	2.4	11.8	8.3	×
26	1.3	6.5	5.1	×	56	2.4	12.4	8.7	○?
27	1.4	6.4	5.3	×	57	2.4	12.0	8.2	×
28	1.4	6.5	5.4	×	58	2.6	12.1	8.0	○
29	1.4	6.6	5.3	×	59	2.4	12.0	8.0	×
30	1.3	6.6	5.4	○	60	2.4	12.1	7.8	×
31	1.3	6.9	5.5	×	61	2.4	12.0	8.0	×
32	1.4	7.0	5.8	×	62	2.4	13.3	10.2	×
33	1.3	6.7	5.3	○	63	2.4	12.4	8.9	×
34	1.5	7.2	5.1	×	64	2.4	12.2	8.6	×
35	1.5	7.4	5.3	×	65	2.4	12.2	8.0	×

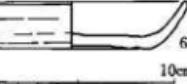
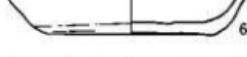
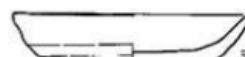
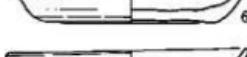
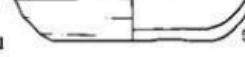
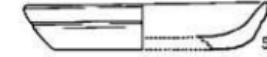
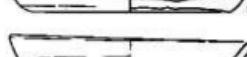
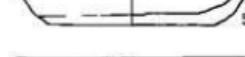
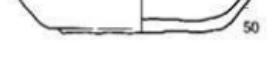
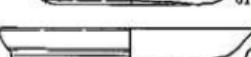
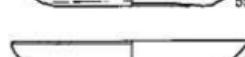
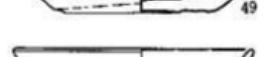
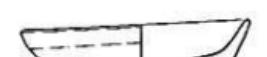
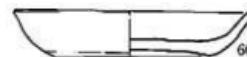
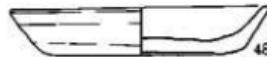
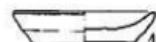
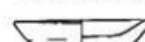
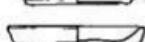
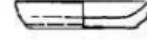
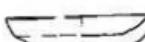
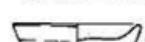
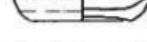
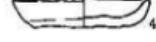
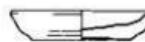
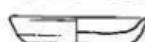
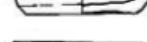
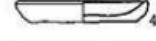
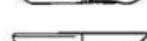
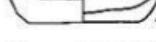
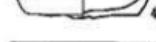
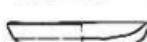
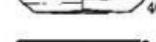
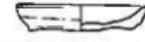
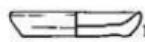
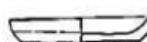
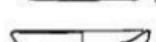
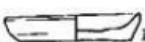
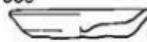
～第2面～

SB144



2 cm

SP050



第9図 第2面出土遺物実測図 (1/3, 1/2)

3. 第3面の調査

第3面は第2面から20~30cm下がった面である。上面の2面と異なり、整地層にしまりがない。標高1.4~1.7mを測る。遺構は列石遺構、土壙、井戸、柱穴等を検出した。遺物は中国製の白磁・青磁、象嵌青磁、備前焼、常滑焼、瓦質土器などの他、将棋の駒、下駄、漆器などの木製品がある。この面は北側を若干、下げ過ぎたため、必ずしも同一の生活面ではなく、幾つかの時期の生活面が予想される。第3面は出土遺物などから、検出遺構は13世紀中頃から14世紀後半に位置づけられる。

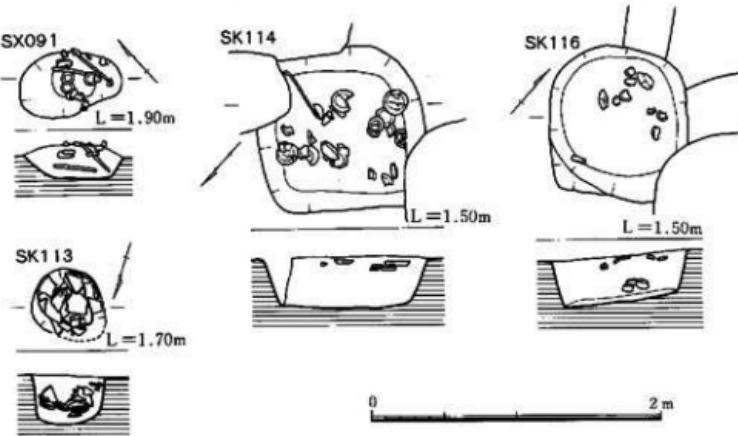
主な遺構の切り合い関係を記すと以下の通りになる。



遺構は當まれているのはこの面までで、これ以下の層は自然堆積層である。前章でも述べたが、基盤には堆積性の灰白砂があり、その上に暗青灰色粘質土が堆積している。この暗青灰色粘質土は西北側にいくにつれて厚くなっている。地形がその方向に傾斜していることが分かる。土層の堆積状態から、この地域は周辺の陸地化が進んだ結果、干潟もしくは沼地などの湿地帯の様相を呈していたものと考えられる。そこを埋め立てて生活面を形成したと考えられる。埋め立ての時期は出土遺物等から、13世紀を前後する時期が想定される。

S K091 (第10図)

SX059の列石で囲まれた中に掘りこまれた土壙である。平面形は不整橢円形を呈し、長軸長80cm、幅46cmを測る。埋土は炭まじりの暗褐色粘質土である。SX059の列石で囲まれた中には



第10図 SK091、113、114、116 遺構実測図 (1/40)

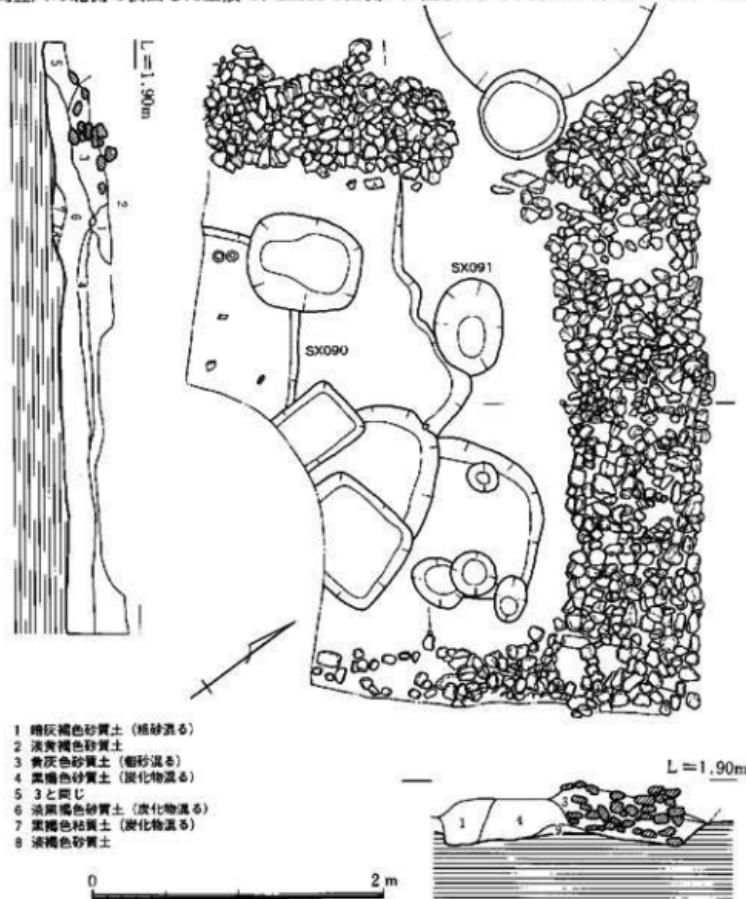
幾つか上層が掘りこまれているが、他の土壌の埋土も同様である。SK091を含めた他の土壌がSX059に伴うものは不明である。遺物は埋土中から土師器皿、棒状鉄製品が出土している。

S K113 (第10図)

調査区の北側で検出した土壌である。平面形は円形を呈し、径50cmを測る。土壌内には破碎された備前焼の甕が出土した。このほか、土師器杯、小皿、銅製品も出土した。

S K114 (第10図)

調査区の北側で検出した土壌で、SK113の西側に位置する。平面形は正方形を呈し、一边1.1



第11図 SX059 造構実測図 (1/40)

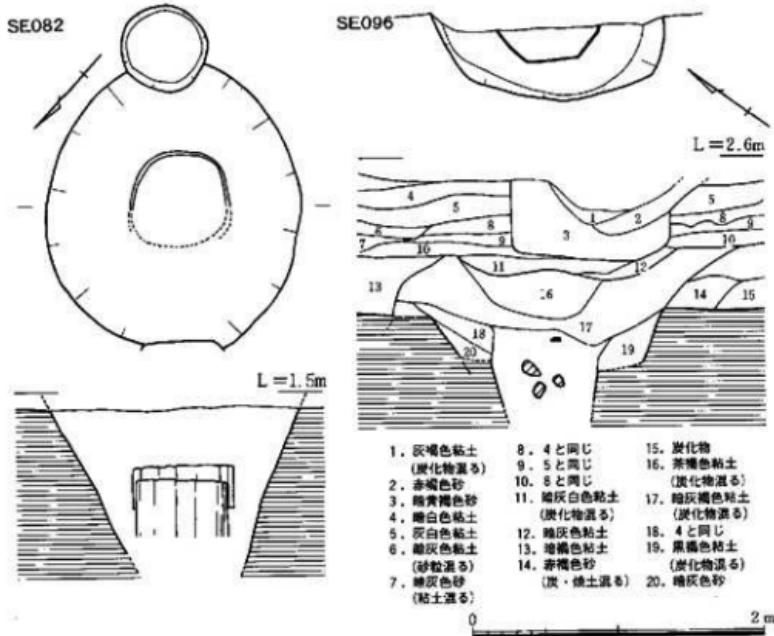
mを測る。埋土は暗灰色粘質土である。遺物は上面近くで、完形の土師器杯、小皿、棒状鉄製品が出土した。

S K 116 (第10図)

調査区の北側で検出した上墳である。平面形は不整橢円形を呈し、長軸長105cm、幅95cmを測る。埋土は暗灰色粘質土である。遺物は上面近くで、完形の土師器杯、小皿が出土した。

S X 059 (第11図)

調査区南側に位置する列石遺構である。調査区外に広がるため、規模は不明確であるが、東西幅約3.4m、南北幅約4.5mを検出した。主軸方位N-54°-Wとなる。列石は幅約1mで、方形に巡る。平面形が正方形であれば、一辺約5.2mと復元される。構造は黄褐色粘質土で整地した面に方形に巡る溝を掘り、その中にこぶし大の礫を充填していく。列石内では土壤、柱穴を検出したが、この遺構に伴うものかは不明である。同様の遺構は博多遺跡群では幾つか見つかっていて、建物の基礎などの性格が考えられている。遺物は列石の上や石の間から土師器小皿、青磁碗などが出土している。遺構の時期は切り合ひ等から14世紀前半代と考える。



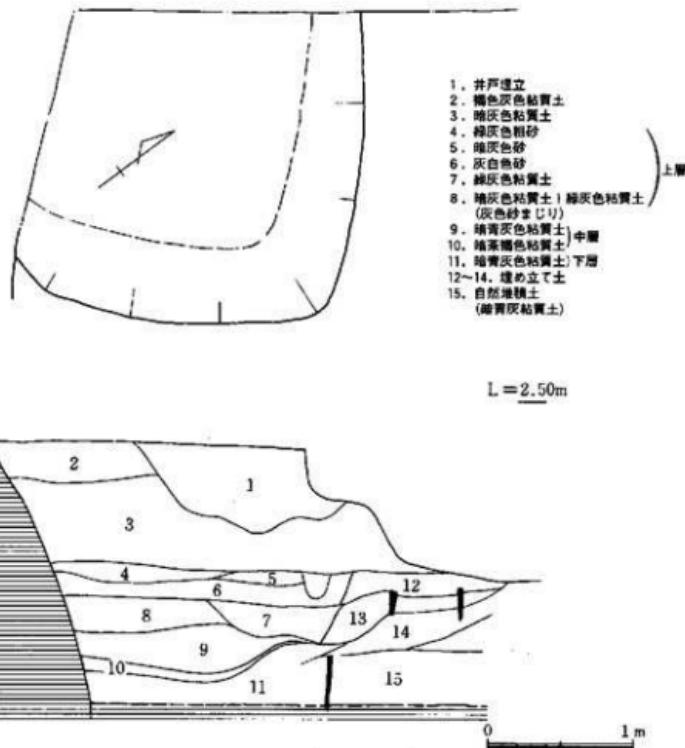
第12図 SE 082、096 造構実測図 (1/40)

S E082 (第12図)

調査区中央にある井戸で、SX059に接する。検出面での掘り方の径は1.7~2.0mとなる。井戸側は直径65cmで、木桶もしくは桶状に板材を立てて並べたものを一段分検出した。最下部は湧水が著しいため、確認できなかった。埋土は上面から50cmはこぶし大の礫がぎっしりと詰まっていた。恐らく第2面の整地を行う際に詰められたものと考える。遺物は埋土から象嵌青磁、銅鏡、土師器皿が出土した。出土遺物から廃絶の時期は14世紀後半代と考える。

S E096 (第12図)

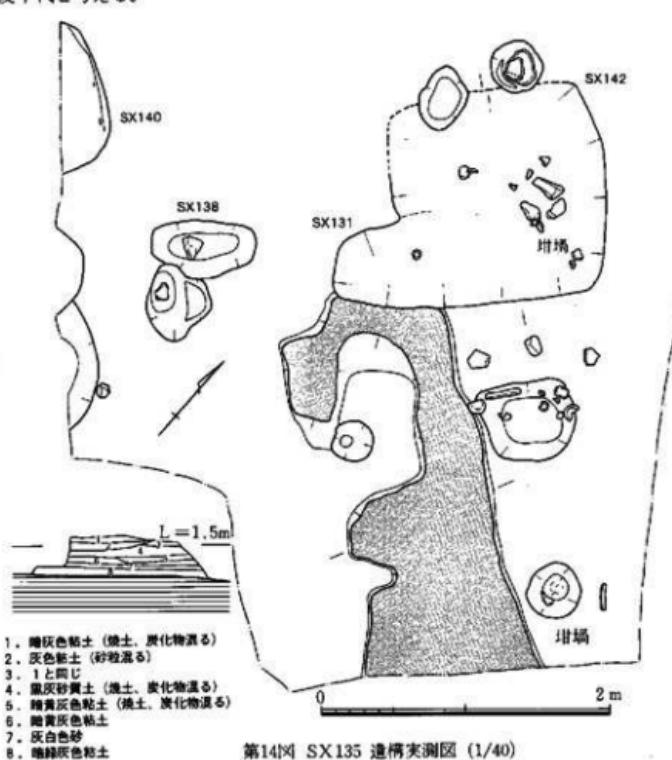
調査区東側にある井戸で、調査区外に広がる。調査途中で壁が崩れ落ちたため、最下層まで確認できなかった。この井戸もSE082と同様、整地の際に埋め戻されたと考える。井戸側は径70cm前後で、木質が残っていたことから、木桶が用いられたものと考える。遺物は掘り方から象嵌青磁、上師器皿が出上した。出土遺物から廃絶の時期は14世紀後半代と考える。



第13図 SX 130 造構実測図 (1/40)

S X 130 (第13図)

調査区北側に位置し、SE001に切られる。掘りこみ面は当初不明であったが、上層観察から第3面からのものと分かった。遺構は西側に広がるため、規模、平面形は不明確である。遺構は最下層の自然堆積層まで掘りこまれている。塙壁には杭の痕跡が認められ、木枠で中には木枠が組まれていたものと考える。埋土は上・中・下の3層に分けられる。上層は4～8層、中層は9、10層、下層は11層となる。下層では多量の木製品が出土した。木製品は使用された物もあり、廃棄されたものと考える。また、一気に廃棄されたのではなく、しばらくの間、廃棄壙として利用されたものと考える。上層の状況から、その後利用されなくなり（9、10層）、埋め戻された（4～8層）ものと考える。遺物は各層から青磁、白磁、土師器、下層から将棋の駒、木筒、下駄、板草履、漆器碗などが出土した。出土遺物などから埋め戻された時期は13世紀後半とされる。



S X 135 (第14図)

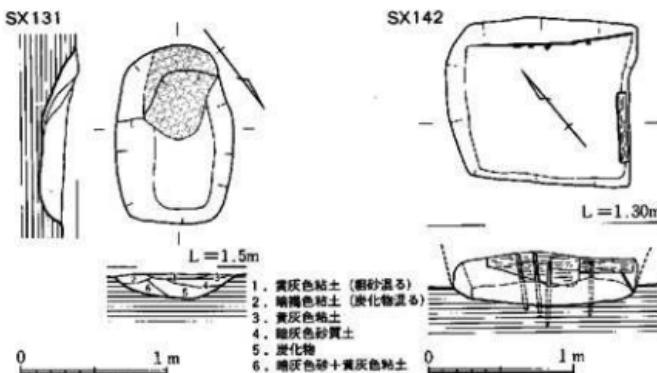
SX059の下層で検出した鋳造関連遺構である。SX059を除去した下面に焼土・炭まじりの層があり、その層を掘り下げると、灰白色の粘土を貼った面を検出した。その面はSX137やSX131の切られているが、周辺からは鉄型、坩埚、ふいごの羽口、銅津などが出土した。粘土の下面は焼土・炭まじりの粘土と砂の互層となっている。遺物の出土状況から近接した場所に溶解炉の存在が予想され、この粘土の貼り床は防湿のための地下構造や作業場などの性格が考えられる。貼り床のある北側にあるSX140、SX142からも、坩埚、ふいごの羽口、銅津などが出土している。これらの遺構は木枠で囲まれた溜糞状のもので、鋳造作業に必要だった水を溜めるための施設と考える。遺物は上記以外に土師器壺、小皿、やりがんな、刀子などが出土した。操業の期間はあまり長く無かったと考えられ、13世紀中頃に操業の期間が当たられる。

S X 131 (第15図)

SX135を切る土壙である。平面形は橢円形を呈し、長軸長125cm、幅80cmを測る。土壙内には $70 \times 40\text{cm}$ の範囲で、焼上面がある。埋上には炭を多く含む。遺物は埋下から十筋器皿が出土した。

S X 142 (第15図)

SX135の北側にあり、土壙の四方を板で囲った枠状の遺構である。規模は $114 \times 124\text{cm}$ を測る。埋上から鉄型片、坩埚、ふいごの羽口、銅津などが多量に出土した。調査区の西側に同様の遺構SX142があり、これらはSX135に付随する施設と考えられる。



第15図 SX131、142 遺構実測図 (1/40)

S X 059出土遺物 (1~9)

1~8は土師器の小皿である。底部の切離しは回転糸切りである。9は熊泉窯青磁である。見込みには「金玉満堂」のスタンプ文を施す。

S K 081出土遺物 (10~16)

調査区北側にある上塙で、SE001に切られる。遺物は埋土中から出土した。

10~12は土師器の小皿で、13は杯である。底部の切離しはいずれも糸切りである。14~16は高麗青磁の碗である。体部はわずかに内湾し、端部は丸く仕上げる。高台は輪状高台で、断面四角形を呈する。内面見込みと高台疊付には目跡が残る。釉色は青灰色~緑褐色を帯びる。法量は14は器高4.0cm、口径11.3cm・底径4.6cm、15は底径5.2cm、16は器高3.8cm、口径11.6cm・底径4.2cmを測る。

S E 082出土遺物 (17~19)

17は土師器の小皿で、18は杯である。底部の切離しはいずれも糸切りである。18は体部の立ち上がりが高い。19は象嵌青磁である。体部下半で折れて、外反気味の口縁につながる。断面台形の高台がつく。内外面には円文、亀甲文のスタンプ文を施す。法量は器高3.8cm、口径11.6cm、底径4.9cmを測る。

S X 088出土遺物 (20)

SE082の脇にある遺構で、完形の備前焼のすり鉢が出上した。掘りこみ面は捉えられなかつたが、すり鉢は上向きの状態で出土した。

20は備前焼のすり鉢で、完形品である。内底面の溝は使用による消耗でかなり掠り減っている。器高11.8cm、口径26.2cm、底径14.5cmを測る。Ⅲ期の特徴を示す。

S X 090出土遺物 (21~25)

SX059の列石内に掘りこまれた土壌である。遺物は土師器のみで、底からやや浮いた状態で出土した。

21~25は土師器で、21~24は小皿、25は杯である。底部の切離しはすべて回転糸切りである。

S X 091出土遺物 (26~31)

26~30は土師器で、26~30は小皿、31は杯である。底部の切離しはすべて回転糸切りである

S E 096出土遺物 (32)

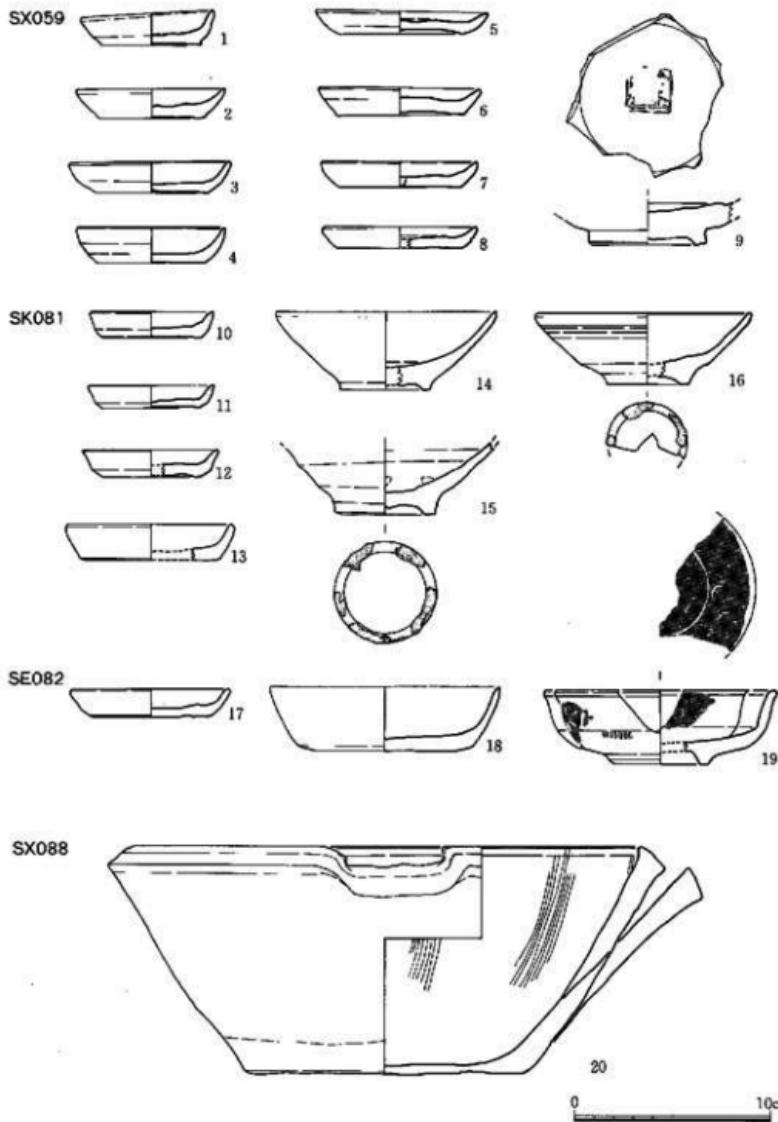
32は象嵌青磁である。体部下半で折れて、内湾気味に口縁は立ち上がる。断面台形の高台がつく。底径5.5cmである。

S X 104出土遺物 (33)

遺構面で検出した遺物で、土壌などの掘りこみは検出できなかった。

33は瓦質土器である。片刃のこね鉢で、体部は直線的に開く。調整は外面はハケメの後、ナ

～第3面～



第16図 第3面出土遺物実測図 1 (1/3)

デを施す。器面には指頭痕が残る。内面は斜方向のハケメを施す。器高12.3cm、口径28.5cmを測る。

S X 109出土遺物 (34~38)

SE082に切られる土壤で、埋土中から遺物が少量出土した。

34、35は土師器である。34は小皿、35は杯である。底部の切離しはすべて回転糸切りである。36は口禿の白磁である。外面は削りによって、蓮弁を施す。釉色は白色を帯びる。37は青白磁で、内面見込みに毛彫りの文様を施す。釉色は淡い空色を帯びる。釉は高台疊付の内側までかかる。38は土鍤である。長さ5.1cm、径1.2cmを測る。

S X 110出土遺物 (39~55)

SX130の傍で出土した遺物である。明確な遺構は捉えられなかつたが、土師器杯、皿の集中が認められた。

39~54は土師器である。39~46は小皿、47~54は杯である。底部の切離しはすべて回転糸切りである。55は瓦質土器である。片口のこね鉢で、体部は直線的に聞く。調整は外面はハケメの後、ナデを施す。器面には指頭痕が残る。内面は斜方向のハケメを施す。器高12.3cm、口径28.5cmを測る。

S X 114出土遺物 (59~73)

59~73は土師器で、59~61は小皿、62~72は杯である。底部の切離しはすべて回転糸切りである。73は白磁を転用した円盤状土製品である。

S X 116出土遺物 (74~80)

74~80は土師器で、74~79は小皿、80は杯である。74は口縁の立ち上がりが高い。底部の切離しはすべて回転糸切りである。

S X 120出土遺物 (81~87)

調査区北側にある集石の下で検出した溝状の遺構である。81~87は土師器で、81~85は小皿、86~87は杯である。底部の切離しはすべて回転糸切りである。

S X 113出土遺物 (88~90)

80~89は土師器である。88は小皿、89は杯である。底部の切離しはすべて回転糸切りである。90は備前焼の甕である。口縁は玉縁になり、体部はなで肩である。口径27.0cmを測る。

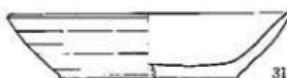
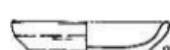
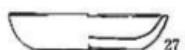
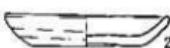
S X 130出土遺物 (91~117)

91~109は七師器の小皿と杯である。91~93は上層、94~101は中層、102~109は下層で出土した。底部の切離しはすべて回転糸切りである。110、111は青磁である。110は上層、111は下層から出土した。110は龍泉窯青磁で、見込みには印花文がつく。111は同安窯青磁で、外面に描き文が施される。112~114は白磁である。すべて下層から出土した。112は玉縁口縁である。113は高い高台をもち、見込みには團線が巡る。114は見込みの釉をかきとる。115は嘴状

～第3面～

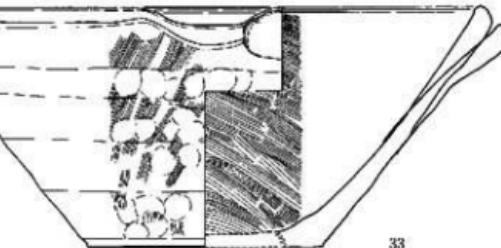
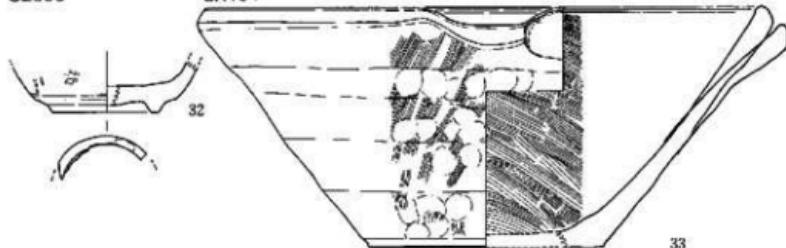


SE091

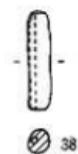
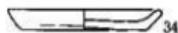


SE096

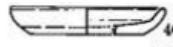
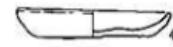
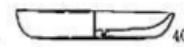
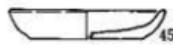
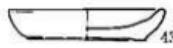
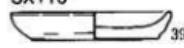
SX104



SX109



SX110



10cm

第17図 第3面出土遺物実測図 2 (1/3)

の口縁端部で、内外面に櫛描き文が施される。116は皿で、体部中位で屈曲する。117は所謂北方系の軒平瓦である。

S X 131出土遺物(118~119)

118~119は土師器の小皿である。底部の切離しはすべて回転糸切りである。

S X 132出土遺物(120~124)

120~123は土師器である。120~121は小皿、122~123は杯である。底部の切離しはすべて回転糸切りである。124は白磁である。底部は露胎になる。底面には墨書が認められる。

S X 135出土遺物(125~134)

125~134は土師器である。125~130は小皿、131~134は杯である。125は口縁の立ち上がりが高い。底部の切離しはすべて回転糸切りである。

S X 137出土遺物(135~137)

135~137は土師器の小皿である。底部の切離しはすべて回転糸切りである。139は青白磁の仏像である。頭のみ残存していた。釉色は青味がかった乳白色を呈する。

S X 140出土遺物(140)

140は丸質の火鉢である。底部の脚は欠損している。外面には菊花のスタンプを施す。口縁は輪花状になる。器高10.0cm、口径37.6cmを測る。

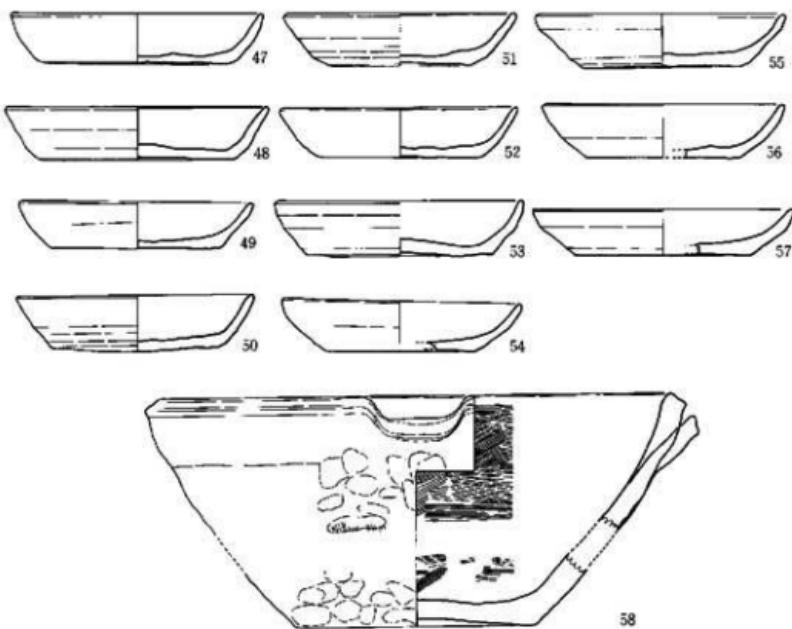
S X 142出土遺物(141~147)

141~147は土師器である。141~144は小皿、145~147は杯である。底部の切離しはすべて回転糸切りである。

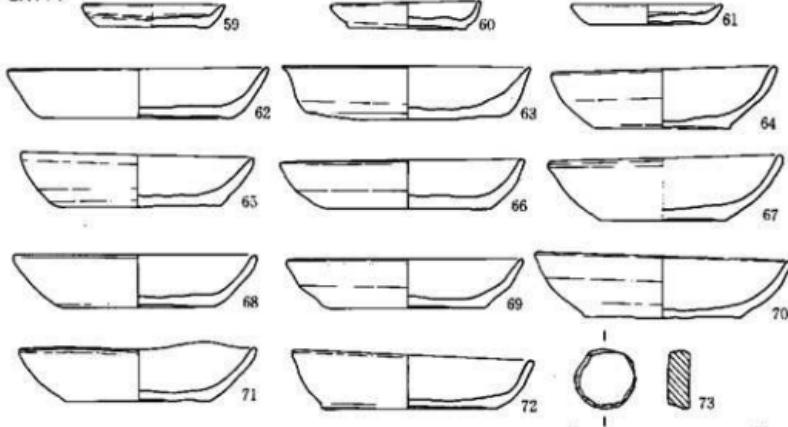
表2 第3面出土土師器法量

番号	器高	口径	底径(cm)	板状底の有無(○・×)	番号	器高	口径	底径(cm)	板状底の有無(○・×)
S X 059 (1~8)									
1	1.6	6.7	5.3	×	5	1.2	8.9	6.4	×
2	1.5	7.6	5.5	○?	6	1.4	8.2	6.8	×
3	1.6	8.1	5.9	×	7	1.3	7.9	6.4	×
4	1.9	7.5	5.6	×	8	1.1	7.8	6.4	○?
S X 061 (10~13)									
10	1.4	6.3	5.1	×	12	1.4	6.9	5.1	×
11	1.2	6.5	5.5	×	13	1.9	8.4	7.2	×
S X 062 (17~18)									
17	1.5	8.4	5.3	×	18	3.3	11.8	9.0	○
S X 060 (21~25)									
21	1.5	8.4	6.3	×	24	1.6	8.0	5.1	×
22	1.6	7.7	5.2	×	25	2.8	14.1	10.0	×
23	1.6	7.8	5.6	×					

～第3面～



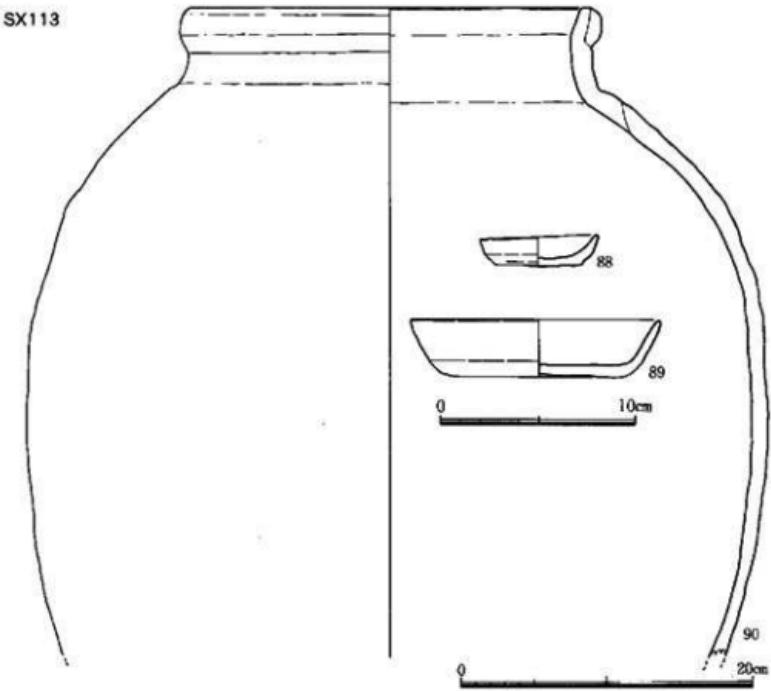
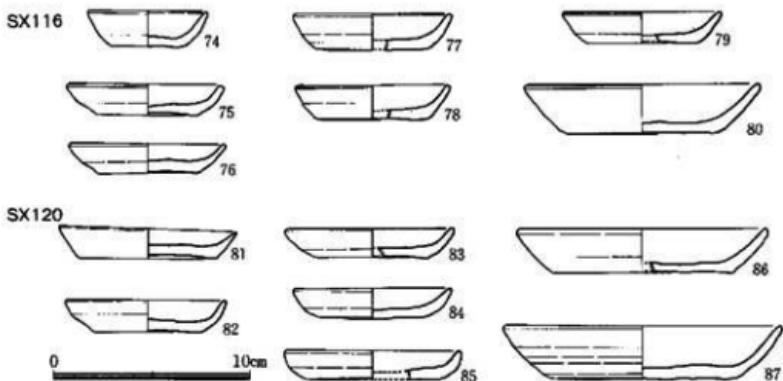
SX114



第18図 第3面出上遺物実測図 3 (1/3)

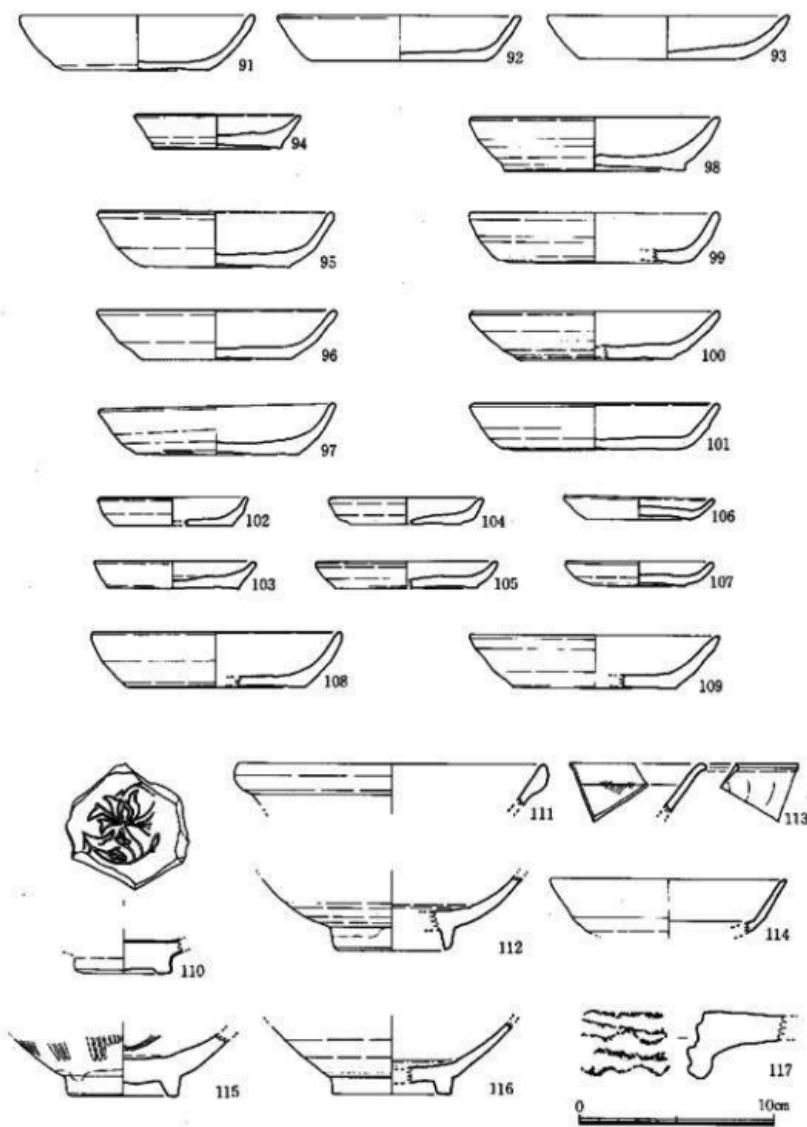
番号	器高	口径	底径(cm)	板状圧痕の有無(○・×)	番号	器高	口径	底径(cm)	板状圧痕の有無(○・×)
S X 091 (26~31)									
26	1.7	8.4	5.9	×	29	1.8	8.1	5.4	×
27	1.8	8.0	5.4	×	30	1.4	7.7	5.7	×
28	1.6	8.3	5.5	×	31	3.3	14.3	9.2	×
S X 109 (34~35)									
34	1.0	8.0	6.5	×	35	2.6	13.2	9.5	×
S X 110 (39~57)									
39	1.5	8.1	6.4	○?	49	2.5	11.8	8.7	×
40	1.4	8.0	6.4	×	50	3.0	12.1	8.2	○?
41	1.4	7.8	6.3	×	51	2.7	11.7	7.5	×
42	1.4	7.9	5.7	×	52	2.6	12.1	8.5	×
43	1.6	7.9	6.1	×	53	2.9	12.4	9.6	○
44	1.9	8.1	5.7	×	54	2.6	12.1	7.7	×
45	1.5	7.9	5.8	○	55	2.8	12.7	8.3	○
46	1.4	7.8	5.9	○?	56	2.8	12.5	8.0	×
47	2.6	13.0	10.0	×	57	2.4	13.4	9.0	×
48	2.7	13.4	10.2	○?					
S X 114 (59~72)									
59	1.2	7.1	5.7	×	66	2.5	13.3	8.5	×
60	1.4	7.5	6.1	×	67	3.2	11.9	6.6	×
61	1.0	7.7	6.0	×	68	2.7	12.4	7.8	○
62	2.6	13.3	9.9	×	69	2.5	12.1	8.0	×
63	2.8	12.7	10.4	○	70	3.2	13.0	8.0	×
64	3.1	11.5	7.0	×	71	2.7	12.0	7.4	○
65	2.7	11.9	8.4	×	72	2.8	12.5	8.8	×
S X 116 (74~80)									
74	1.8	6.2	3.3	×	78	1.8	7.7	5.6	×
75	1.6	7.7	5.2	○	79	1.6	7.9	5.7	×
76	1.5	7.8	5.2	×	80	2.5	11.7	7.7	×
77	1.9	7.9	6.0	×					
S X 120 (81~87)									
81	1.5	9.2	7.1	×	85	1.5	8.9	6.9	×
82	1.7	8.1	5.5	○	86	2.3	12.7	6.3	×
83	1.5	8.6	5.7	×	87	2.8	14.2	9.1	×
84	1.6	8.1	5.4	×					
S X 113 (88~89)									
88	1.5	6.0	4.5	○	89	2.9	12.8	8.7	×
S X 130 (91~109)									
91	2.8	12.2	7.6	×	101	2.4	12.7	8.6	○
92	2.3	12.6	9.0	○	102	1.5	7.5	6.2	×
93	2.2	12.6	8.7	○	103	1.4	8.3	6.9	×
94	1.3	8.3	6.7	×	104	1.4	7.8	5.3	×
95	2.9	12.0	7.6	×	105	1.4	9.2	7.4	○
96	2.5	12.2	7.8	×	106	1.2	7.8	5.5	×
97	2.5	12.1	8.5	×	107	1.3	7.6	4.4	×
98	2.8	12.7	8.4	×	108	2.9	12.8	9.4	×
99	2.6	12.9	9.0	×	109	2.4	12.7	8.6	○
100	2.5	12.7	7.9	×					

～第3面～



第19図 第3面出土遺物実測図 4 (1/3)

～第3面～



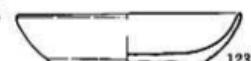
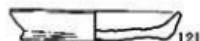
第20図 第3面 (SX130) 出土遺物実測図 5 (1/3)

~ 第3面 ~

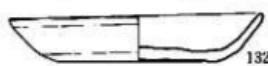
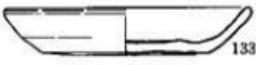
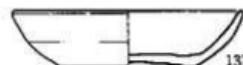
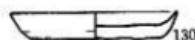
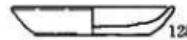
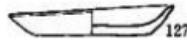
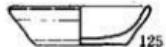
SX131



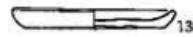
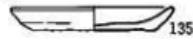
SX132



SX135



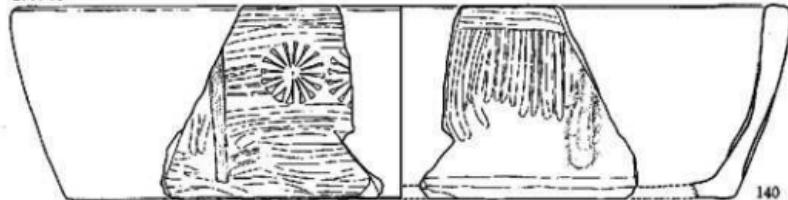
SX137



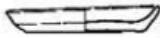
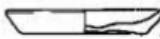
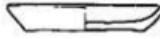
SX138



SX140



SX142



第21図 第3面出上遺物実測図 6 (1/3)

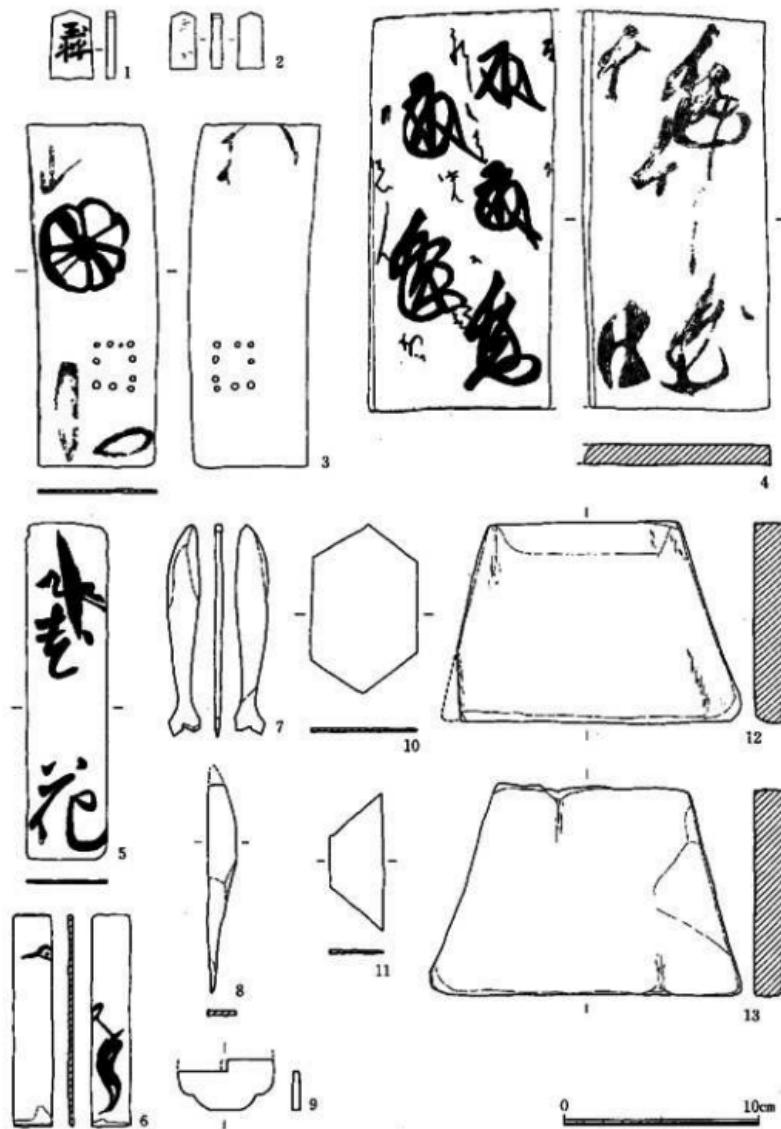
番号	器高	口径	底径(cm)	板状圧痕の有無(○・×)	番号	器高	口径	底径(cm)	板状圧痕の有無(○・×)
S X 131 (118~119)									
118	1.0	4.1	6.3	×	119	1.6	7.7	6.4	×
S X 132 (120~123)									
120	1.1	7.7	6.5	×	122	2.3	12.5	9.7	○
121	1.6	8.6	7.5	○	123	2.6	11.6	8.1	×
S X 135 (125~134)									
125	2.0	7.0	4.7	○	130	1.4	8.5	6.8	○
126	1.2	8.7	6.5	○	131	2.9	11.8	6.9	×
127	1.3	8.5	6.0	○	132	2.4	12.9	8.2	×
128	1.5	8.4	6.0	×	133	2.4	12.3	8.8	○
129	1.0	7.6	6.3	×	134	2.9	13.0	10.4	○
S X 137 (135~138)									
135	1.2	8.3	6.4	×	137	1.1	8.3	6.4	○
136	1.0	8.2	7.3	×	138	1.1	8.0	6.3	×
S X 142 (142~148)									
141	1.4	7.9	6.1	○	145	2.7	11.6	8.1	×
142	1.3	8.0	6.3	×	146	2.8	12.8	9.4	○
143	1.2	7.8	6.1	×	147	3.0	13.7	8.2	×
144	1.1	8.2	6.5	×					

S X 130出土木製品（第22~24図）

1、2は将棋の駒である。1は「王将」である。長さ3.4cm、幅2.0cm、厚さ0.4cmを測る。2は残りが悪いため、種類を確定しがたいが、形態などから「香車」と推定する。長さ2.8cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。3~6は墨書きした木札である。3は穿孔を施した板材で、両面に墨書きが見られる。径2mm程の穴が9つあり、曲げ物の材と考えられる。墨書きは左面は花文が描かれている。その回りに墨痕が観察できるが、判読はできない。右面も残りが悪く、人物画の様にも見えるが、定かではない。長さ17.4cm、幅6.0cm、厚さ0.1cmを測る。4は両面に花押を書いた木札である。長辺の一方が割れている。墨書きは左面は残りが良いが、右面は残りが悪い。4については付編で詳しく触れるのでここでは内容については記述しない。5は薄い板材で、片面に墨書きが見られる。「鳥の絵」、「鳥か」、「不明」、「花」と判読できる。「鳥か」と「花」の間にもかすかに墨痕が残るが、判読できない。しかし、絵と文字の組合せから推測して花の絵が描かれていた可能性が考えられる。長さ20.0cm、幅9.6cm、厚さ1.0cmを測る。6は両面に鳥の絵を描いた木札である。左面は頭を、右面は全体を描いている。下端には赤色顔料が付着しており、へらなどに使用されたものと考えられる。長さ10.8cm、幅2.0cm、厚さ0.1cmを測る。7は魚を形どった木製品である。長さ10.8cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。8は刀形の木製品である。長さ10.6cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。9は刀の鋸状の木製品である。長さ4.9cm、厚さ0.4cmを測る。10、11は六角形と五角形を呈した木製品である。加工の際に出た切れ端と考えられる。12、13は組合せ式の下駄の歯である。平面形は梢円形を呈し、

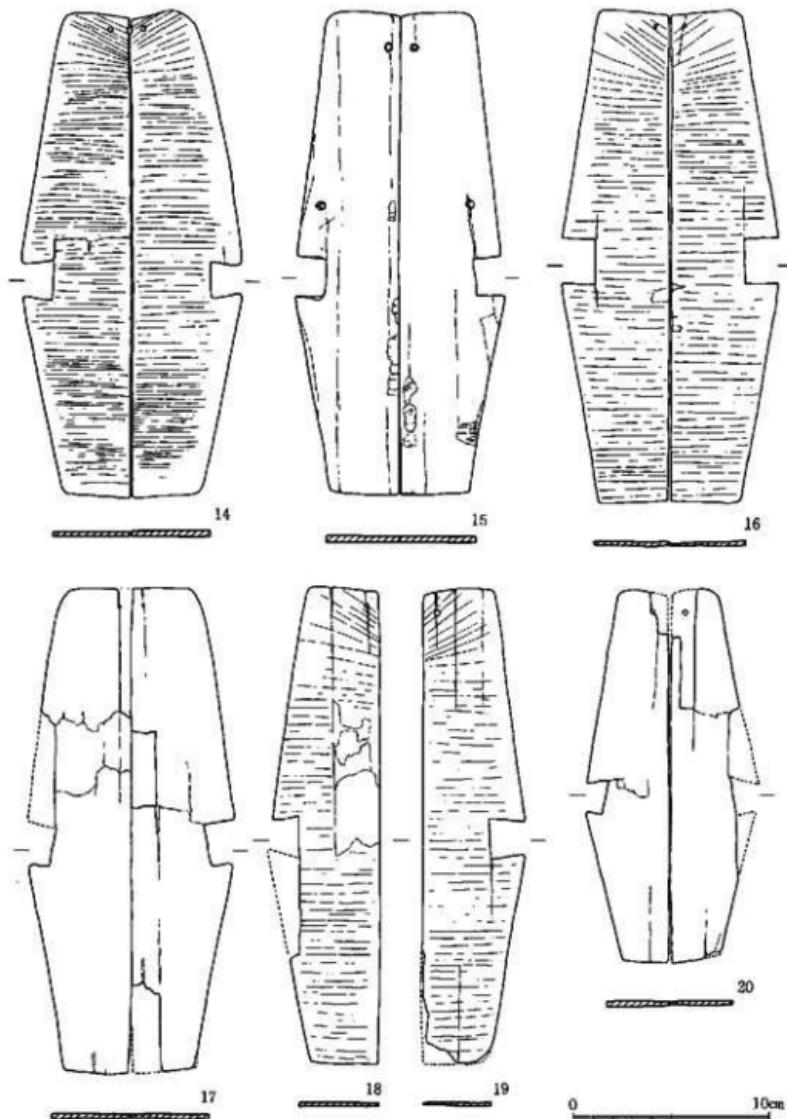
下面是使用による磨耗が見られる。12は長さ10.5cm、幅16.1cm、厚さ1.6cmを測る。13は長さ10.2cm、幅14.6cm、厚さ1.6cmを測る。14～15は板草履である。14は先端の3カ所に穿孔がある。長さ24.6cm、幅11.2cm、厚さ0.2cmを測る。15は先端の2カ所と両側に各1カ所に穿孔がある。表面には葉が付着している。長さ24.5cm、幅10.8cm、厚さ0.3cmを測る。16は先端の2カ所に穿孔をもつ。表面の削り痕が明瞭である。長さ25.0cm、幅11.2cm、厚さ0.2cmを測る。17は残りが悪く、欠損している。先端の2カ所に穿孔をもつ。長さ24.9cm、幅10.8cm、厚さ0.2cmを測る。18、19は半分ずつしか残存しておらず、18は長さ24.5cm、19は24.5cmを測る。20は小型の板草履で今回出土したこのタイプは1点のみである。部分的に欠損しているが、先端の2カ所に穿孔をもつ。器形そのものは他のものと変わることはない。長さ19.0cm、幅8.8cm、厚さ0.3cmを測る。21は漆器の椀である。椀は割れていたが、ほぼ完形に復元できる。内湾する体部に低い高台がつく。器面には黒色漆の下地に赤色漆で菊の花の絵を描く。外面には花を側面からみた絵を、内面見込みには上から見た絵を描く。体部の一部に欠損した部分があり、そこには桜の皮で留めた痕跡が見られる。使用中に割れたため、そこを補修して再び使用したと考えられる。器高5.2cm、口径15.8cm、底径7.8cmを測る。22～24は箸である。箸は総数で100本以上出土しており、ここでは代表的なものだけ掲載した。箸には断面形は扁平になるものと方形もしくは多角形になるものがある。両端は削って尖らせる。数量的に両者はほぼ半数ずつあり、機能差・使い分けなどは無く、単に工人の差であろうと考える。24は片方だけ尖らせるもので、この遺構からはこれ1本である。25～28はへら状の木製品である。25は断面台形で先端を尖らせ、上方には側面から穿孔を施す。長さ18.0cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。26は断面長方形で、先端を尖らせる。片面の中央には浅い溝状の切り込みを入れる。長さ21.4cm、幅1.3cm、厚さ0.5cmを測る。27は断面長方形で、先端を尖らせる。長さ22.5cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmを測る。28は断面橢円形で、先端を尖らせる。長さ27.8cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmを測る。29は曲げ物である。欠損して一部しか残存していないが、桜の皮でとめた部分が残る。30～34は加工のある木製品である。30は薄い板材で、上端に穿孔をもつ。31は薄い板材を途中まで半數し、上端を互い違いに斜めに切り落とす。側辺の一方に切り込みを入れる。32は上方が斜めに切られている板材で、表面には貫通していない穴が見られる。33は断面長方形を呈し、3カ所の穿孔が施される。34は欠損しているが、片方にはぞが施される。

ここからはこの他多数の加工のある木製品が、出土しているが、用途が不明の物が多い。ここで掲載したもの以外に結構の擦や扇子の骨と考えられるものなども出土したが、尖端できるものは少なく、ここでは省いた。また、木製品の木の種類については今回分析をおこなっていないので、ここでは記述していない。



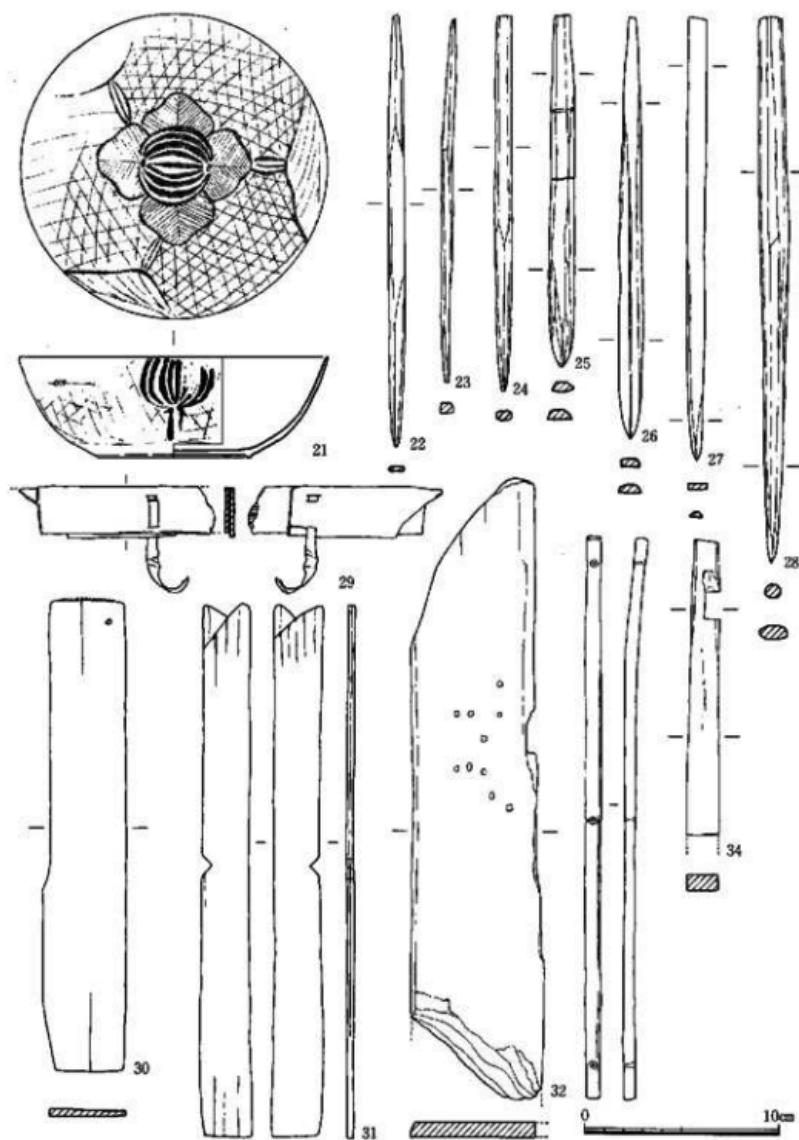
第22図 SX130 出土木器実測図 1 (1/3)

~ 第3面 ~



第23図 SX130 出土木器実測図 2 (1/3)

～第3面～



第24図 SX130 出土木器実測図 2 (1/3)

鋳造関連の遺物（第25図）

ここでは今回出土して鋳造関連の遺物について記述する。遺物はいずれもSX135とその周辺で出土したものである。

鋳型（1、2、9、10）

1、2、9、10はSX135から出土した。1、2は楕円形の大型容器、もしくは鍋の鋳型と考える。1は外型、2は内型である。1は厚さ約3cmで、鋳型面は強い熱をうけて黒褐色に変色している。外側は赤褐色を呈する。構造は粗真土は砂粒、すき、粉殻などが混入する。仕上げ真土は厚さ5~10mmほどである。径約32~34cmの製品が想定される。2も構造は同様で粗真土と仕上げ真土からなる。製品の下の部分にある。鋳型面は強い熱をうけて黒褐色に変色している。背面は手づくねである。9はすさまじい十製品で、表面は熱をうけていて、かなり剥落している。厚さ約4cmを測る。両側に2カ所、穴が見られ、その部分も熱変している。用途は不明であるが、鋳造の際の注ぎ口とガス抜きの穴と考えれば、何らかの鋳型の一部とも考えられる。10は平面形U字形を呈し、片面が熱変をしている。すきなどは含まず、仕上げ真土からなる。部位は不明であるが、1、2と組み合わせて使用する可能性が考えられる。

坩堝（3~6）

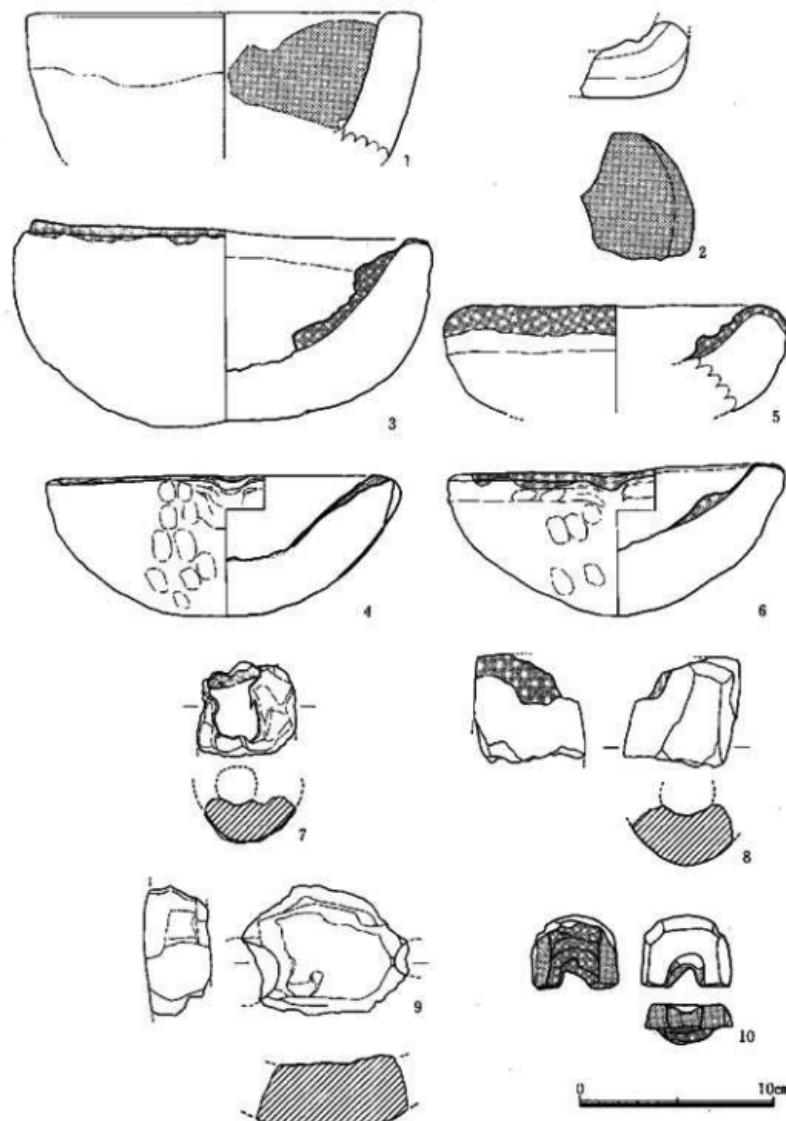
鋳造に際して、炉で溶かした溶解物を受けて、鋳型に湯を注ぐ容器である。いずれも手づくねで、表面に指頭痕が残る。胎土には粗砂、粉殻などを多く含む。坩堝には大・小に種類がある。3はSX142、4、6はSX135、5はSX137から出土した。3は大型品で、内湾する体部で、底部はやや平坦である。注ぎ口は見られない。器高9.9cm、口径21.0cmを測る。内面にはガラス化した溶解物が厚く付着している。断面観察では溶解物は何層かに層を成しており、複数回使用されたと考えられる。4~6は小型品で、4は完形品である。注ぎ口は2カ所あり、内面には、ガラス化した溶解物が付着している。底は丸底である。器高7.7cm、口径15.3cmを測る。5は残存するのみで、注ぎ口の有無は不明である。底はやや平坦になる。口径15.1cmを測る。ガラス化した溶解物が付着している。6は1/3残存するのみで、注ぎ口は1カ所見られる。底は丸底である。器高7.8cm、口径15.9cmを測る。ガラス化した溶解物が付着している。坩堝に付着した溶解物は赤褐色、黒褐色、緑色などを呈しており、銅製品の鋳造に使用されたものと考える。

ふいごの羽口（7、8）

7、8とも破片で、全体の器形は不明だが、先端にいくにつれて窄まっていく。胎土は粗砂を多く含む。穴の内径は約2~3cmほどのものと推測される。先端にはガラス化した溶解物が付着する。7はSX135、5はSX142から出土した。

SX135とその周辺の遺構からはこの他、多くの銅鋳物や溶解した鉱物なども出土している。これらの遺物を見るかぎりでは銅製品の鋳造が行われたことが推測される。

～第3面～



第25図 第3面出土铸造関連遺物実測図 (1/3)

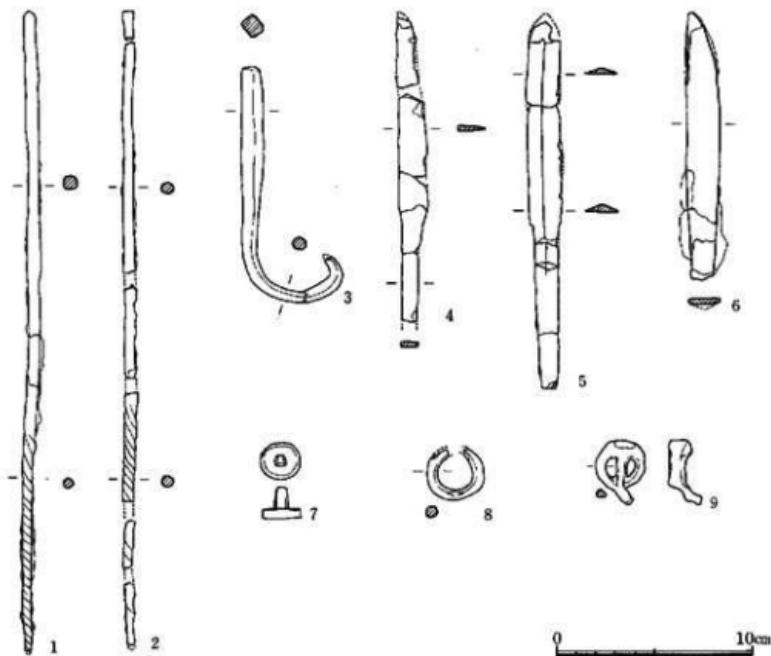
第3面出土の鉄・銅製品（第26図）

1、2はSX091から出土して棒状の鉄製品である。先端は螺旋状になっている。これらはほぼ同じ長さ、形態であり、一对のものだとすると、火箸などの用途が考えられる。

3はSX091から出土した手鍵状の鉄製品である。断面形は円形で、長さ12.3cmを測る。

4、6は刀子である。いずれも残りが悪い。4はSX135、6はSX137から出土した。5はやりがんなである。断面形三角形で、長さ12.7cm、幅1.8cmを測る。SX135から出土した。4～6は鋳造に係わる作業（鋳型の作成など）に使用されたものと推測する。

7～9はSX135の上面で出土した銅製品である。7はスタンプ型の銅製品である。8はリング状の銅製品で、飾り金具の一部と考える。9はリング状の銅製品に、ピン状の銅製品を付けたもので、用途不明。これらはここで鋳造された製品の可能性が考えられる。



第26図 第3面出土鉄・銅製品実測図（1/3）

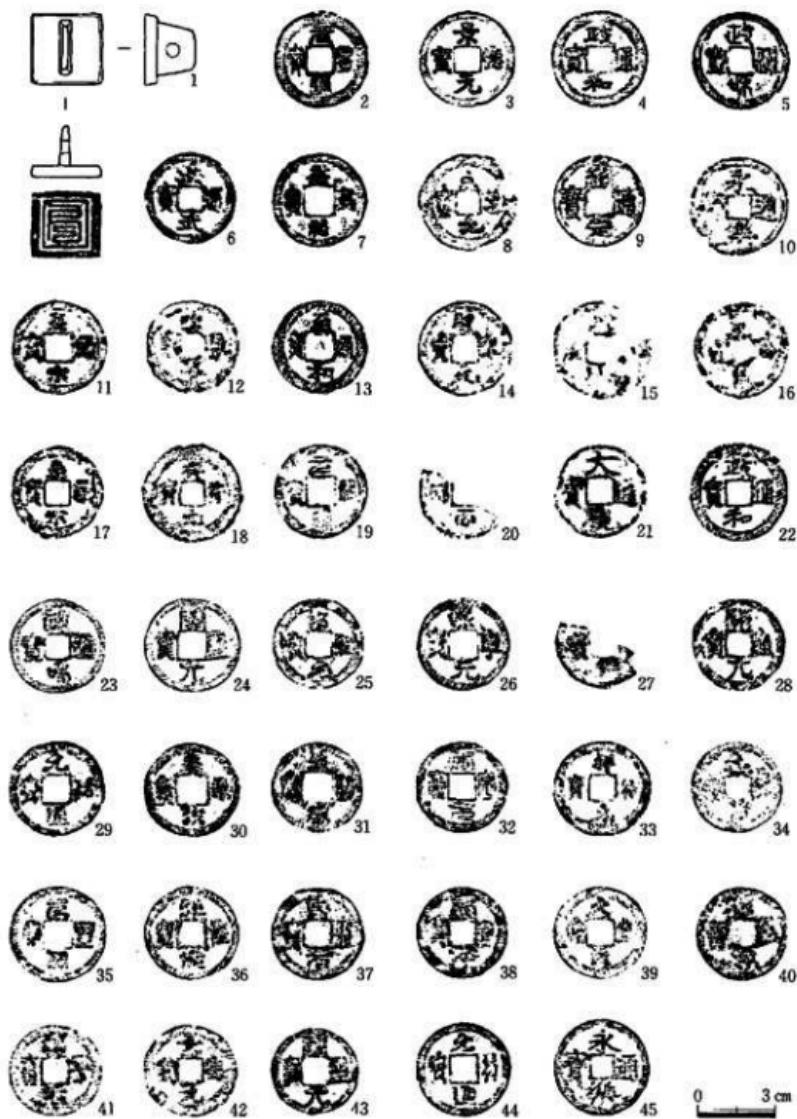
4. その他の遺物

ここでは整地層から出土した銅印と銅錢について記述する。銅錢については表に示した。

1は1~2面で出土した銅製の印である。印面は方形を呈し、小孔が施された偏平の紐がつぶ。印面の幅1.8cm、高さ1.8cmを測る。印面には陰刻で、文字が刻まれる。文字は元(1271~1368)代の公用文字であるバスバ文字に類似する。日本ではバスバ文字の印は長崎県鷹島で、「官軍總把印」と記した官印が出土している。博多遺跡群では第35次調査で元代のバスバ文字銘の「大元通宝」の銅錢が出土している。今回出土した印は大きさなどから官印ではなく、私印の可能性が考えられる。私印には化押印や封印などがあり、これもその類とも考えられる。しかし、通用のバスバ文字とは異なり、バスバ文字としては読みず、元代のものと断定することはできない。しかも、今回、銅印が出土した層は15~16世紀のものであり、遺構に伴うものではないので、帰属する時期も決めるのは難しい。したがって、ここでは銅印の種類、性格については保留しておく。今後、この印についての類例を含め検討課題としていきたい。

表3 銅錢一覧表

番号	出土面	出土地点・遺構	銅錢名	時代	初	終
2		整地層	宋通寶	北宋	建隆元年	960年
3	1~2面	整地層(下層)	景德元寶	北宋	景德元年	1004年
4	2面	整地層	政和通寶	北宋	政和元年	1111年
5	2面	S X046	政和通寶	北宋	政和元年	1111年
6	2面	S X046	政和通寶	明	洪武元年	1368年
7	2面	S P0501付近	嘉祐通寶	北宋	嘉祐元年	1056年
8	2面	S P0501付近	千秋元寶	北宋	景德元年	1004年
9	2面	S P0501付近	嘉祐通寶	北宋	嘉祐元年	1023年
10	2面	S P0501付近	永樂通寶	明	永樂元年	1403年
11	2面	S P0501付近	仁宗通寶	北宋	寶元2年	1038年
12	2面	S P0501付近	人中通寶	明	正統四年	1436年
13	2面	S P0501付近	永祐通寶	北宋	聖和元年	1054年
14	2面	S P0501付近	聖宋元宝	北宋	建中靖國元年	1101年
15	2面	S P0501付近	?	?	?	?
16	2面	S P0501付近	人祐通寶	北宋	天禧年間	1017~1021年
17	2面	中央付近	宋宋通寶	北宋	寶元2年	1038年
18	2~3面	中央付近	祥符元寶	北宋	大中祥符元年	1008年
19	2~3面	中央付近	元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年
20	2~3面	中央付近	?	?	?	?
21	2~3面		大觀通寶	北宋	大觀元年	1107年
22	2~3面	S X0501付近	政和通寶	北宋	政和元年	1111年
23	2~3面	中央付近	政和通寶	北宋	政和元年	1111年
番号	出土面	出土地点・遺構	銅錢名	時代	初	終
24	2~3面	中央付近	開元通寶	唐	武德4年	621年
25	2~3面	中央付近	開元通寶	北宋	熙寧元年	1068年
26	2~3面	中央付近	熙寧通寶	北宋	熙寧元年	1068年
27	2~3面	中央付近	?	?	?	?
28	2~3面	中央付近	開元通寶	唐	武德4年	621年
29	2~3面	中央付近	元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年
30	2~3面	中央付近	皇宋通寶	北宋	寶元2年	1039年
31	2~3面	中央付近	空空通寶	北宋	寶元2年	1039年
32	2~3面	中央付近	治平通寶	北宋	治平元年	1064年
33	2~3面	中央付近	皇宋通寶	北宋	寶元2年	1039年
34	2~3面	中央付近	元豐通寶	北宋	元豐元年	1078年
35	2~3面	中央付近	元豐通寶	北宋	元豐元年	1078年
36	2~3面	中央付近	治平通寶	北宋	治平元年	1064年
37	2~3面	中央付近	開元通寶	唐	武德4年	621年
38	2~3面	中央付近	熙寧通寶	北宋	熙寧元年	1068年
39	2~3面	中央付近	元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年
40	2~3面	中央付近	寶元通寶	唐	武德4年	621年
41	2~3面	中央付近	治平通寶	北宋	治平元年	1064年
42	2~3面	中央付近	熙寧通寶	北宋	熙寧元年	1068年
43	3面	S X0501下層	開元通寶	唐	武德4年	621年
44	3面	S E001	元祐通寶	北宋	元祐元年	1086年
45	3面	南華付近	永祐通寶	明	永祐元年	1403年



第27図 その他の遺物 (2/3)

第4章 まとめ

今回の調査では13世紀から17世紀に至るまでの遺構・遺物を検出した。ここでは今回の調査で得られた成果と問題点について述べていく。

1) 遺構について

今回の調査では包含層を4面に分けて、調査を行った。各面の時期は以下の通りである。1面は16世紀代、2面は15世紀代、3面は13世紀中頃～14世紀後半、4面は13世紀を前後する時期に位置づけられる。調査の結果、この地区は湿地帯を埋め立てた上地で、13世紀中頃から人々の生活の場となる。14世紀を前後する時期から、建物や井戸などの生活に関連した遺構が見られるようになる。14世紀以降、16世紀末にかけて、連綿と生活面は営まれている。それでは主な遺構について見ていく。

列石遺構 今回の調査では第3面で列石遺構SX059を検出した。時期は14世紀前半代に位置づけられる。列石は幅80～100cmで方形に巡る。規模は遺構が調査区外に広がるため、不明確であるが、一辺5m程の方形プランの遺構と推定される。博多遺跡群の今までの調査でもこの種の遺構は多く見られる。

築港線第3次調査地点（上呉服町1番地）では4.5m×3.4mの長方形プランの列石遺構が出土している。51号配石遺構とされた遺構は二段に掘りこんだ土壙の一段目の壁に沿って、礫を積み上げる。上面の石の幅70～100cmを測る。二段目の土壙の床には砾を敷き詰める。土蔵のような大型の建物の半地下式の下部構造と考えられている。16世紀後半から17世紀を示す遺物が出土している。第40次調査地点では14～16世紀末のN-48°～51°-Eを主軸方位とする道路が検出されているが、その道路の方向にほぼ沿うように列石遺構が見られる。3号集石遺構はコの字型の集石遺構で、幅40～65cmの溝を掘り、その中に礫を敷き詰める。一辺約3mを測る。16世紀代の面で検出されている。4号集石遺構はコの字形の集石遺構で、幅95～110cmの溝を掘り、その中に礫を敷き詰める。遺構の一部を近世の井戸に切られているが、規模5.5m×4.7mを測る。集石に囲まれた中には集石と方位を描いて、1×1間に柱穴が配置されている。15世紀代の面で検出されている。9号集石遺構は同様の構造を持ち、集石の幅35～50cmで、5.9×4.25mの長方形プランを呈する。1号集石遺構と同様集石の中に1×1間に柱穴が配置されている。さらに、遺構の南側に1×1間の礎石立ちの建物が取りつく。14世紀代の面で検出された。ここでは14～16世紀にわたって、継続して営まれていることがわかる。最近の調査例を中心に類例を見てきたが、このタイプの列石遺構は時期的には14世紀～16世紀に見られ、幅約50～100cmで方形もしくは長方形にめぐる。今までの分布をみると、博多浜の北側、それも第40次調査で検出された道路の南側に付近に集中して見られる。この遺構の性格については土蔵などの建物の地下構造などが想定されているが、そのような建物が道路の南側に14世

紀から16世紀末にかけて立ち並んだ町並みが想像できる。息の浜でも将来、この種の遺構は検出される可能性は大きいが、このタイプの建物の分布がどのような広がりを持ち、構造面を含めてどういう性格をもつかは、今後の類例の増加を持って検討していきたい。

建物の方位 建物は第2面でSB144を検出した。2×4間以上で、桁行720m以上の大型の建物である。主軸方位はN-52°-Wを取る。建物の方位についていえば、SX059の主軸方位はN-54°-Wを取る。第1面では建物は復元できなかったが、礎石の柱筋はN-52°～54°-Wとなり、3面から1面にかけてほぼ同一の方位を取る。この方位は40次調査で検出された道路方向には厳密には一致していないが、道路を意識した町割りが行われていることが想定できる。この地域は13世紀前後に埋め立てが行われて、生活面として利用されるようになるが、この地区が町の一端として本格的に機能するようになるのは、14世紀前半にこの道路が作られてからであろう。それ以後は16世紀末に至るまで、連続と生活が営まれる。その際の建物・道路の方向は古代から続く磁北方向ではなく海岸線を意識したものである。この地域の開発が2度の元寇を経た14世紀前半に行われたということは大きな意味を持つと言えよう。

鋳造遺構 鋳造遺構SX135は第3面で検出した遺構で、SX140、SX142がこれに付随すると考えられる。ここでは出土遺物などから銅製品の鋳造が行われたものと考える。ここから出土した鋳型は注ぎ口のついた大型の容器のものと考えられる。博多遺跡群ではこれまで鋳造や鍛冶に係わる工房遺構や遺物は数多く出土している。それらのうち、銅製品の鋳造に係わるものについて見ていく。築港線第1次調査では工房跡が検出されている。109号上塙は掘立柱の上屋構造をもち、銅滓や坩埚、未製品が出土している。時期は15世紀に比定されている。第47次調査区は本調査区の西側約100mの所にあり、多量の銅滓や坩埚、鋳型、炉壁、ふいごの羽口が出土している。14世紀代と考えられている。第63次調査では0045号遺構から多数の土師器、中国陶磁器とともに、容器の鋳型、ふいごの羽口、坩埚が出土している。時期は13世紀後半と考える。銅製品の鋳造に係わる遺構は出土例は多くないが、13世紀後半から14世紀かけて博多浜西側の下流近くにこの種の遺構が点在しているのが分かる。原料の搬入・製品の搬出などを考えればこのことは肯綮である。今後の調査で出土例は増えると予想されるが、町の中での鍛冶や鋳物などの工房の在り方を検討しなければならないだろう。

2) 遺物について

今回の調査で出土した遺物はコンテナ30箱程度である。遺物は中国製輸入陶磁器（同安窯青磁、龍泉窯青磁、白磁、明代の染付など）、朝鮮製輸入陶磁器（高麗青磁、象嵌青磁、李朝青磁など）、国産陶磁器（備前焼、常滑焼、瀬戸焼、唐津焼、伊万里焼など）、瓦器、瓦質土器、土筋器、瓦類、木製品、鉄製品、銅製品、坩埚、鋳型、ふいごの羽口が出土している。上器類では土器器皿、皿は多量に出土しているが、それに比べ、輸入陶磁器類の量が少なかった。それでは主な遺物について見ていく。

木製品 第3面のSX130からは多量の木製品が出土した。遺構の時期は13世紀中頃～後半に位置づけられる。木製品には将棋の駒、墨書きのある木札、漆器椀、下駄、板草履、虫物、箸など多種に及ぶ。将棋の駒は「玉将」と「香車」の二種が出土した。¹⁾水野和雄氏によると、現在、駒の出土例は平安時代から江戸時代にかけて30例が知られている。最古の資料としては兵庫県日高遺跡の「歩兵」で、嘉保(1094～1096)年銘の木筒と一緒に出土している。鎌倉時代の資料では新安寺海底沈没船をはじめとして、7例がある。博多遺跡群では始めての資料であるが、今後の調査で駒の出土の可能性は大きい。

鋳造関連遺物 第3面のSX135とその周辺からは鉢型、坩堝、ふいごの羽口などが出土した。今回出土した鉢型は銅製の容器と考えられる。同様の鉢型の類例は太宰府史跡第109・111次調査で見られる。調査区は觀世音寺の南側に当たり、SK3295を中心に多くの鉢型が出土している。鉢型にはそのほかに仏像、鉛杖などの仏具の多く出土している。これらの遺物は12世紀～13世紀前後に位置づけられている。遺物の様相から觀世音寺に関係が深いものであったことがわかる。今回の調査では容器以外の鉢型は出土しなかったが、この鋳造工房がどの様な性格のものであったかは今後の大きな課題である。

銅製品 1～2面間から銅製の印が出土した。詳細については前章で述べた通りである。この印が元代に位置づけられるかは今後検討していかなければならないが、ここではバスパ文字の銅印を参考までに掲げておく。この銅印に関して御教示頂ければ幸いである。今回出土した銅印の文字については大阪外国语大学外国语学部中国語学科助教授 佐々木猛先生に貴重な御教示を受けた。ここに記して、お礼申し上げます。

以上、今回の調査で得た成果と問題点である。遺構、遺物とも充分に報告したとは言いたいが、今回掲げた問題点については課題として考えていきたい。

註

- 1) 水野和雄「将棋の流行」「古代史復元10古代から中世へ」1990
- 2) 九州歴史資料館「第109・111次調査」「太宰府史跡－昭和62年度調査概報」平成元年3月
- 3) 佐々木猛「鑿島免見の『管草絆把印』・腰略」「福岡人文学人文論叢第13巻第4号」昭和57年3月
- 4) 叶其峰「故宮藏元八思巴字印と柏原問題」「文物1987-10」
- 5) 集吉印譜 宋元時代の私印より
- 6) 今回の銅印の素材は鉛青銅（鉛の含有量が多い）。主成分は銅、鉛、錫、微量成分は鉻、亜鉛である。分析は、正倉院事務所或濃正和氏による。



(1/2)

(2~5は1/1)

第28図 バスパ文字銅印 (1は註3より、2~4は註4より、5は註5より引用)

付編 博多61次調査地点出土の花押墨書木簡

福岡大学人文学部 佐伯弘次

博多遺跡群第61次調査地点（福岡市博多区店屋町182-1～5）で出土した、花押墨書木簡について、若干の所見を述べたい。この木簡は造構の下層の13世紀後半の土壌（SX130）から出土した。したがって、鎌倉時代後半のものということができよう。

1) 形状

タテ最長20.0cm×ヨコ最長9.6cm、厚さは1.0cm。長方形形状の形をしているが、正確には豊の両辺の長さが若干異なるため、長方形に近い台形である。⁽¹⁾草戸千軒出土木簡の形状分類に従うと、100ということができよう。ただし、後述するように、この木簡は完形ではなく、一部が欠落している。素材は杉材を使用している。

2) 墨書の内容

板の両面に花押を墨書している。このため、本稿では、花押墨書木簡とした。便宜上、花押が5個墨書されている面をA面、4個墨書されている面をB面と呼ぶことにしたい。A面は、肉眼でも墨書の形状を明確に認識することができる。B面は、赤外線テレビカメラを使用しても、墨書の跡は不明瞭である。

まず、A面の篆文を示そう。A面は花押が堅2列に書かれており、右側が豊に3個、左側が豊に2個書かれている。花押の列の前後には文字の墨書がある。文字の部分は不鮮明であるため、判読しがたい箇所が多いが、2列の花押の間の文字は「うれしく候に」と判読した。第1列の花押の右側、即ち木簡の右側には2字の文字の残画がある。上の文字は「左」に似ている。この残画からすると、本木簡は完形ではなく、少なくとも右側が一部欠落していることが判明



木簡出土状況

SX130暗青灰色土中
B面を上にむけて出土。
他にも将棋の駒、漆器
椀など木製品多数出土。
13世紀後半。

する。

次にB面の訳文を示そう。B面は花押が2個ずつ2列にわたって墨書きされている。花押間に墨書きの痕跡があるようであるが、訳読できない。

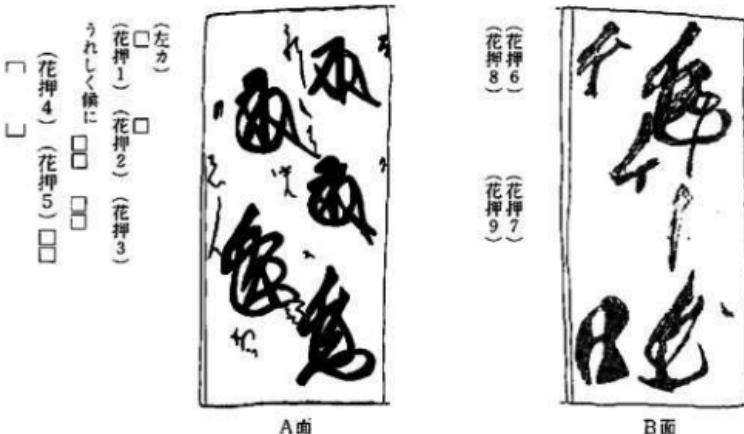
3) 花押の検討

[A面]

東京大学史料編纂所編『花押かがみ』1~4を通覧し、A面の5個の花押と照合したが、一致するものはなかった。したがって、誰の花押であるかは判明しなかった。5個の花押を形状から分類すると、2グループに大別される。花押3・5の2個は公家様花押タイプであり、花押1・2・4の3個は武家様花押のタイプである。ただし、このことは、必ずしも前者を公家が書き、後者を武家が書いたことを意味するものではない。あくまでも花押の形状分類である。花押2と花押4はよく似ているが、若干の相違点がある。

5個の花押は、いずれも当時の民衆のものとは考えがたく、ある程度の社会的身分を有した者の花押と考えられる。1枚の文書あるいは木簡に、公家と武家が同時に花押を書くことは通常考えられない。これらの花押は武家のものではなかろうか。もちろん、公家や僧侶、神官等の可能性も残されている。

武家様である花押1・2・4は、『花押かがみ』所収の花押を参考すると、鎌倉中後期の北条氏や幕府奉行人・得宗被官の花押に形状のタイプが似ている。これらの花押を、幕府系あるいは北条氏系の花押と仮定し、かつこの木簡が出土地の近辺で作成されたと仮定すると、13世紀



SX130 出上木簡 (1/3)

後半の博多の政治史との関連で解釈されうる。鎮西特殊合議訴訟機関、鎮西談議所、鎮西惣奉行所、鎮西探題等の鎌倉幕府出先機関が浮かび上がってくる。一つの可能性として、こうした幕府出先機関の奉行人タレスの者の花押という解釈も成立するだろう。もちろん、それを断定できる史料はまったくないが。ともかく、これらの花押は、博多の民衆のものではなく、非在地系の花押であると規定しておきたい。

[B面]

B面の花押は極めて不鮮明である。『花押かがみ』1~4と照合したが、一致するものは見出しえなかつた。花押6と花押8は、大きさが異なるが、よく似ており、同一の花押の可能性がある。さらにこの2個の花押は、A面の花押3ともよく似ている。花押9は、花押1・2・4と類似しているが、不鮮明なため断定できない。B面の花押も、A面と同様、民衆のものではなく、非在地系の花押と規定できる。

4)木簡の性格

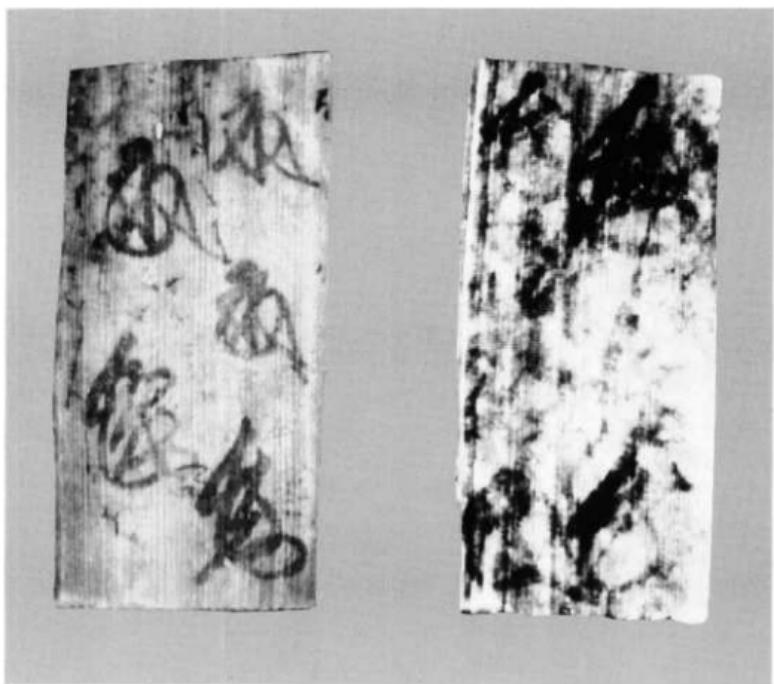
草戸千軒出土の木簡は、1.文書様木簡、2.付札、3.呂書・楽書に大別分類されている。花押を多数墨書きした木簡は、『草戸千軒—木簡一』には収録されていない。したがって、本木簡が、1~3のどれに該当するのか、あるいはそれ以外の範疇に入るのかを、本木簡に即して検討する必要がある。

B面に同・らしき花押が書かれていることは、この木簡が書簡である可能性を示している。しかし、鮮明なA面では、異なる5個の花押が明瞭に書かれており、呂書とは断定できない。いま一つの可能性を探る手掛かりは、この木簡に記されている文字である。「うれしく候に」という文言と花押から、書状が連想される。すなわち、1の文書様木簡のうち、狹義の文書に該当するという想定である。花押が複数存在することから、連署状ということになる。しかし、本来の書状は、実名を書き、その下に花押を書くのが通例である。さらに連署状の署名は、横に並列するのが原則である。花押が堅に並んで記されている点も書状本来の様式と異なる。花押の間に文字を書く点も、通常の文書には見られぬ点である。したがって、本木簡を文書様木簡と断定することはできない。本木簡が完形でないことも、その性格を特定できない原因の一つとなっている。本木簡の用途=性格は、現時点では不明とせざるをえない。これを明らかにするには、今後、類似の木簡の発見と中世木簡研究の進展が不可欠の要素となるだろう。

註

- (1) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒—木簡一解説一』、広島考古学研究会、1982年。
- (2) 古川弘文館、1964~85年。
- (3) 『草戸千軒—木簡一解説一』19頁。

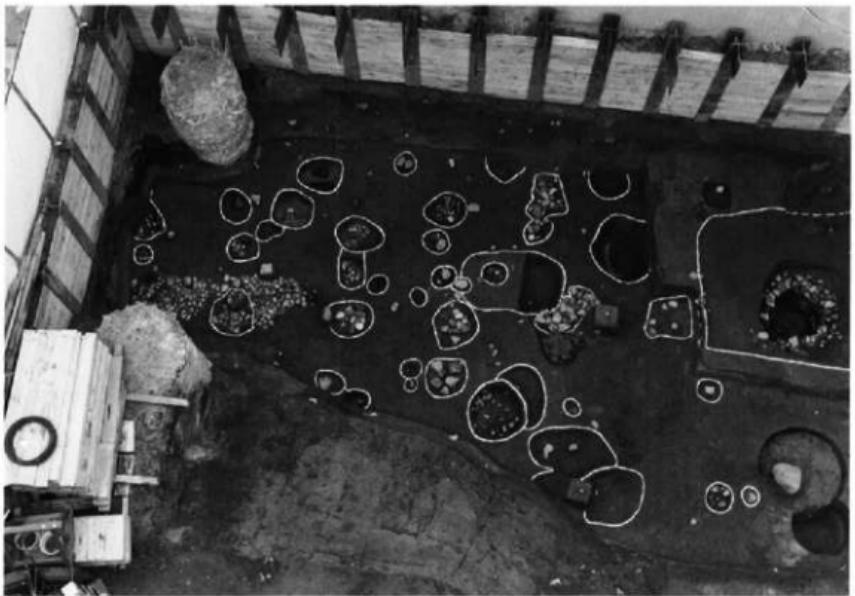
図 版



SX 130 出土木簡（赤外線写真、左一A面、右一B面）



1. 第1面全景（東から）



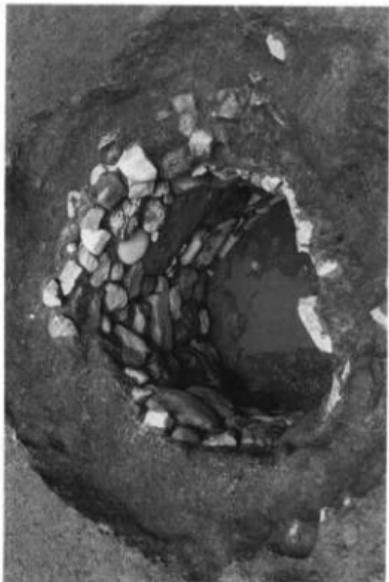
2. 第2面全景（東から）



1. 第3面全景（東から）



2. 最下層全景（東から）



3" S四-四 (東から)



4" S四-四十九 (東から)



1" 調査区南側土壁



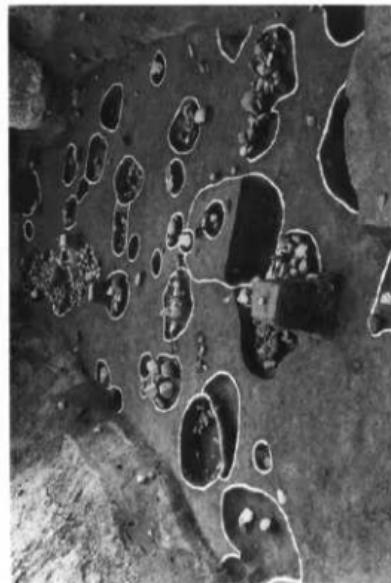
2" 調査区西側土壁



1" SB-I (北から)



2" SB-II (西から)



3" SB-III (北から)



4" P-I (遺物出土状況 (南から))



3' S X-5の石塀ちらり（南から）



4' S X-5の石塀ちらり（西から）



1' S X-5の石塀（東から）



2' S X-5の石塀（南から）



3' SX-10遺物出土状況



4' SX-10遺物出土状況



1' SX-10土解(南から)



2' SX-10遺物出土状況



3' SX-15出土堆



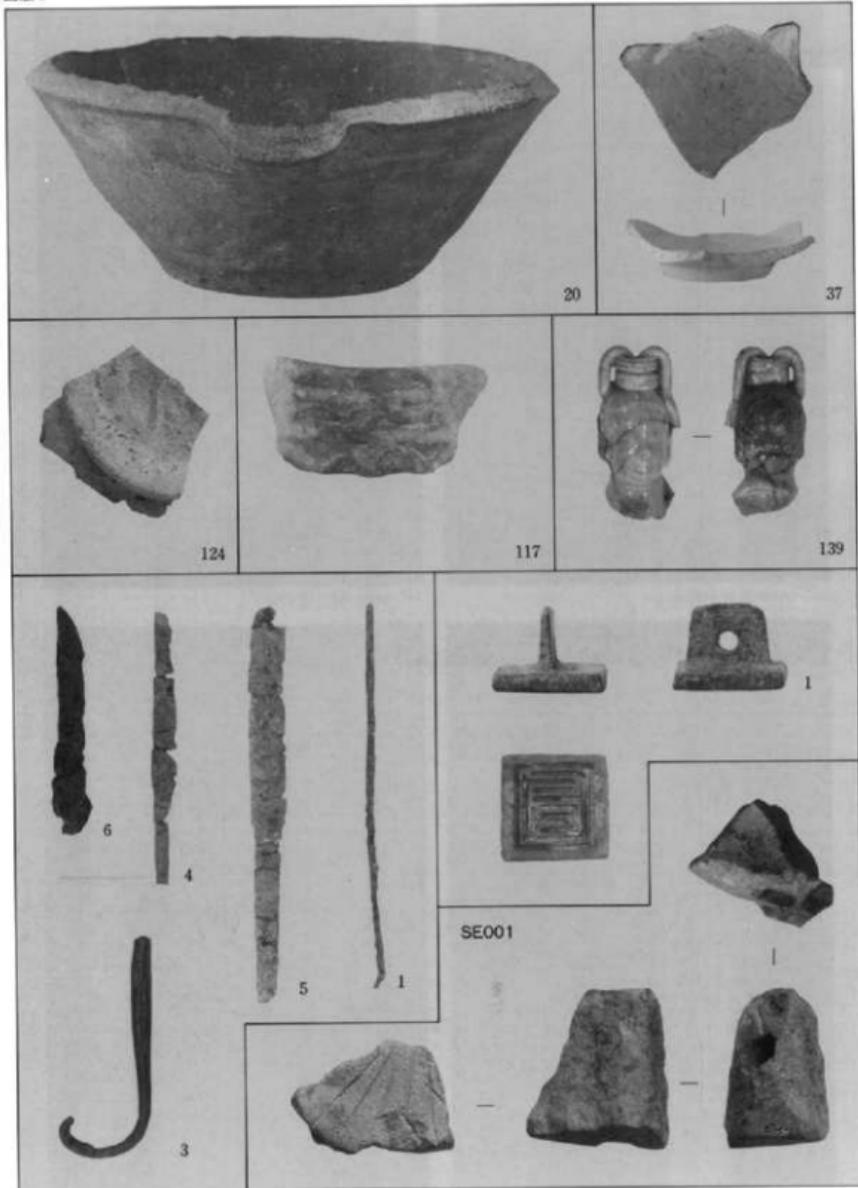
4' SX-15 (西から)



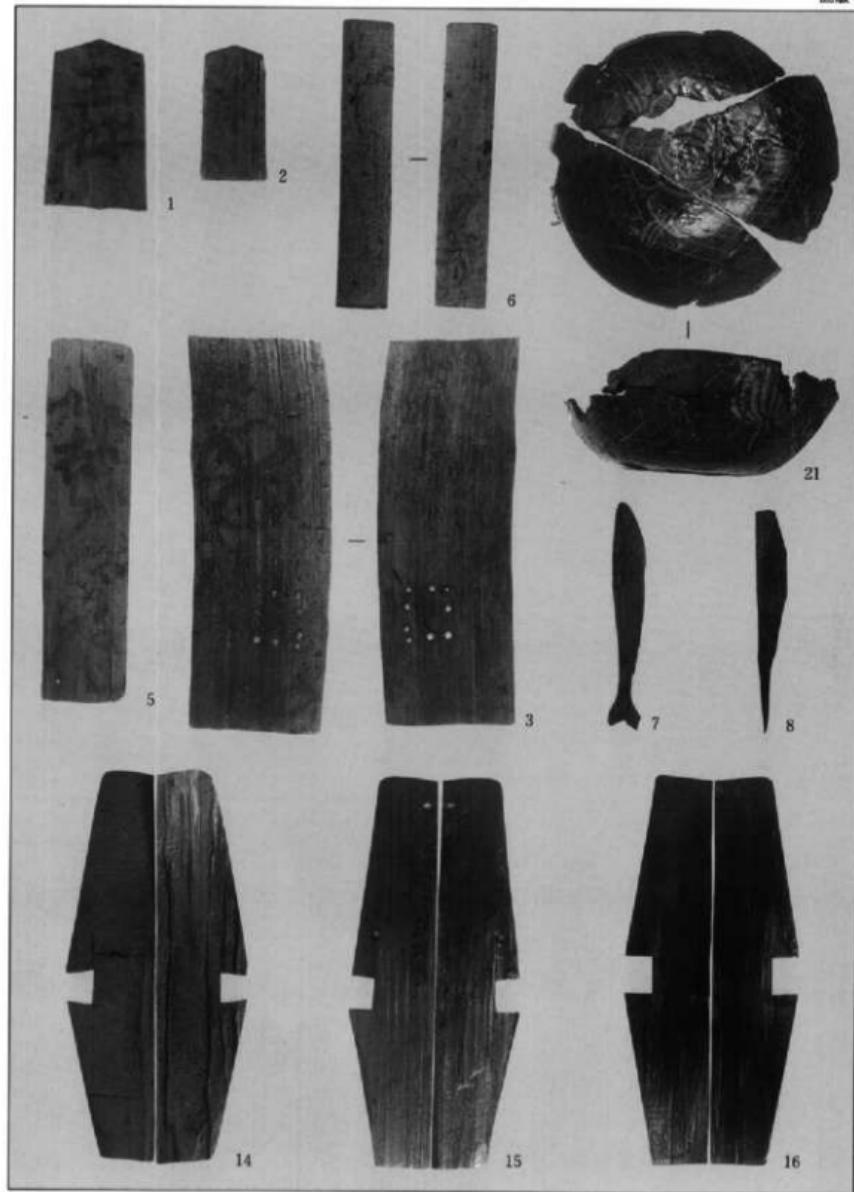
1' SX-15 (南から)



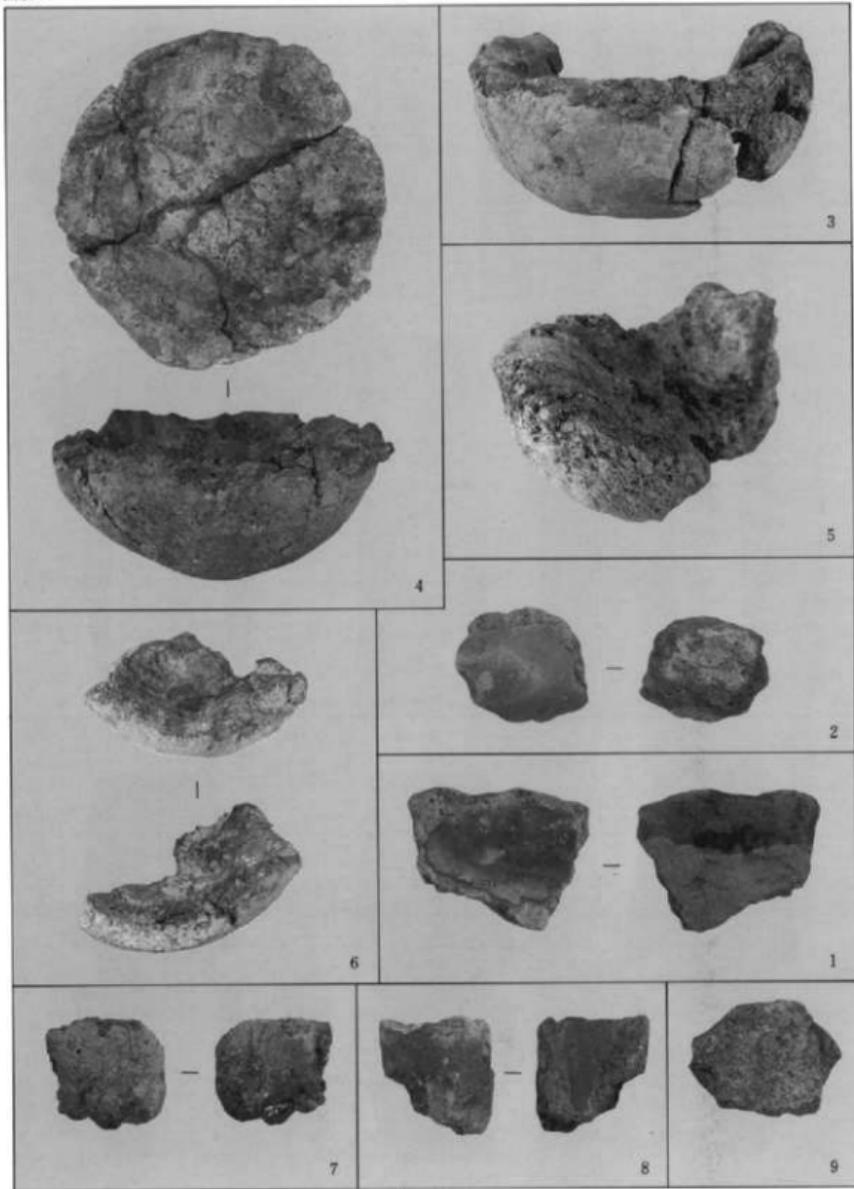
2' SX-15 断面剥り (北から)



出土遺物 1



出土遺物 2



出土遗物 3

博多24

**—博多遺跡群第61次発掘調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第252集**

1991年3月15日

発 行 福岡市教育委員会

印 刷 福博綜合印刷株式会社